

業務資料 №680

# ゆづかり

第11回移住者子弟技術研修生  
研 修 レ ポ ー ト

1983年3月

国際協力事業団

移国内

J-R

83-6

国際協力事業団

受入  
月日 '84. 5. 21 000

登録No. 06380 24.7  
ESD

## ま え が き

国際協力事業団では、中南米各地の移住者子弟を本邦に招致し、その子弟の属する地域社会の発展に必要な技術研修および知識を修得せしめることを目的に「移住者子弟技術研修制度」を実施している。

この制度は昭和46年度から実施し、本年4月に第13回生を迎えることになり、受入れた研修生は、現在研修中の第12回生を含め、総数195名になっている。

各研修生は幼い頃両親に連れられて移住し成人となった、あるいは中南米の地で生れた二世の人達の中から選ばれた子弟であるが、父母が生まれ育った国における研修は、単に技術を身につけるということだけでなく、日本の文化そのものを学ぶ良い機会ともなった訳である。

高度成長した日本の社会機構の中で身をもって体験し、かつ、修得した知識と技術を生かし、研修生諸君が帰国後移住地および地域社会の発展に大きな貢献を果すものと確信するものである。

本誌は第11回生（研修期間：昭和56年4月～57年9月）の1年6カ月間にわたる研修総括報告書および研修記録をまとめたものである。

最後に移住者子弟技術研修制度を深くご理解いただき、研修生諸君を温かくご指導下さった、関係機関の皆様にあらためて感謝の意を表する次第である。

1983年3月

JICA LIBRARY



102813011

国際協力事業団  
移住事業部長





訪日時の第11回生一同  
外務省前にて  
(56年4月)



合同研修会  
伊豆長岡  
(56年10月)

合同研修会  
比叡山 根本中堂  
(57年8月)





合同研修会  
片山津  
(57年8月)



合同研修会  
日産自動車座間工場  
玄関前(57年10月)



研修報告会  
海外移住センター  
(57年9月)

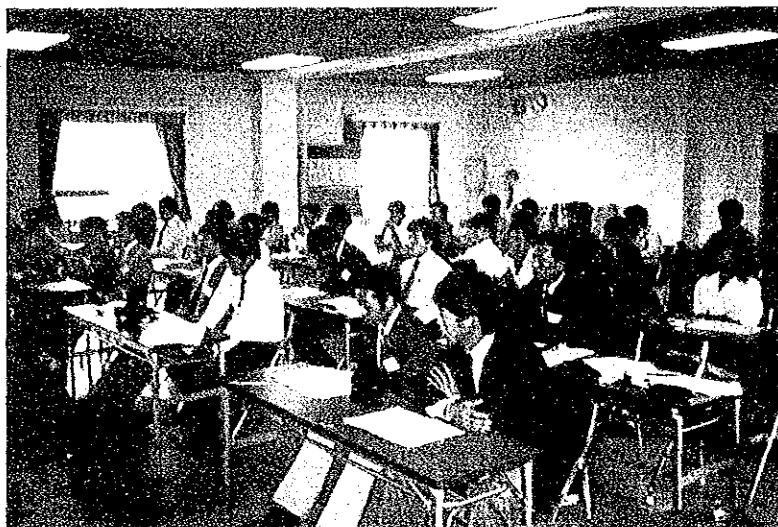




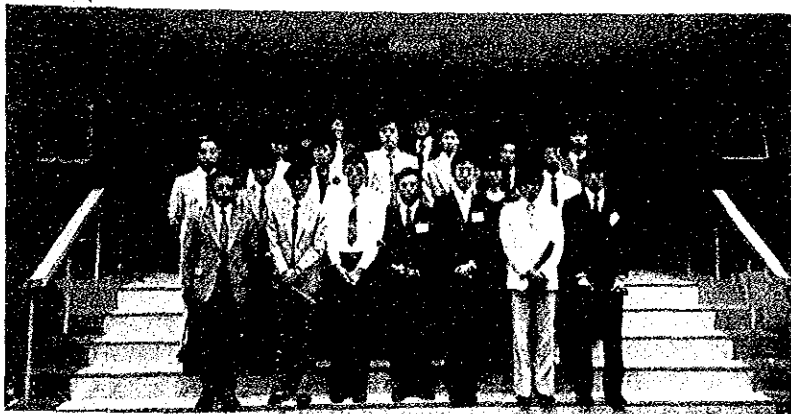


研修報告会  
海外移住センター  
(57年9月)

研修報告会  
海外移住センター  
(57年9月)



## 個人事業団海外移住セン



研修修了記念  
(57年9月30日  
海外移住センター  
玄関)



# 目 次

まえがき

研修総括報告書		1
ブラジル国	テレゾポリス	有田 淳シユル 1
	ベレン	池田 悟アルマンド 4
	ベレン	大西シユゼ 8
	レシーフェ	後藤真吾 10
	グァタバラ	鈴木俊一 13
アルゼンチン国	サンタナー・ド・イタラレ	石東寅雄ウイルソン 16
	ウルキッサ	永橋正也 19
	ブルサコ	伊佐ラウル・エドワルド 22
パラグアイ国	アルト・パラナ	矢野真次 25
	フラム	野中孝之 29
	イグアス	関 節己 33
ボリビア国	オキナワ	山内京美 36
	オキナワ	井上悦子 38
	サンファン	松本伸彦 40
ドミニカ国	サント・ドミンゴ	吉元美貴子 43
ペルー国	リマ	瀬戸ホルヘ 46

前期研修を終えて		51
	鈴木俊一	51
	後藤真吾	52
	石東寅雄	53
	永橋正也	54
	関 節己	54
	井上悦子	55
	瀬戸ホルヘ	56

合同研修会に参加して .....	59
有田 淳シユル .....	59
池田 悟アルマンド .....	60
永橋正也 .....	61
野中孝之 .....	62
松本伸彦 .....	64
山内京美 .....	65
日本の印象 .....	67
鈴木俊一 .....	67
後藤真吾 .....	67
野中孝之 .....	68
矢野 真次 .....	69
山内京美 .....	70
吉元美貴子 .....	71
子弟研修生一覧表 .....	73

# 研修総括報告書



# 研修総括報告書

有 田 淳

1. 研修機関 (1) 前期 高知県立実践農業大学  
(2) 後期 同上
2. 研修期間 昭和56年4月～57年9月
3. 研修職種 そ果菜栽培技術
4. 当初の研修計画

国際協力事業団、リオ・デ・ジャネイロ州支部から選ばれた僕は、農業に関することに限られていた。家では農業経営してますので、僕はそれで充分だと思っていました。農業の中で専攻したのは近郊蔬菜で特にイチゴの栽培についてであり、日本語を学ぶことも目的の一つでした。

## 5. 研修概要

ブラジルの普通校を卒業した僕は2年間両親の手伝い程度の経験しかなかったのに、日本での研修は本格的に農業の勉強の出来る絶好の機会であり、研修の全部が収穫でした。

本校は名の通り農業大学ですが、短大の形で2年間で卒業できます。授業は全員全科目授けます。実習は野菜、花卉、果樹と専修別に分かれます。実習では6人の班に分かれて10aの面積でビニール温室を担当して、先生の指導を受け希望の作物を種から出荷まで管理します。色々と試験も出来、イチゴを担当してる僕は株間により収量の違いとか、交配による奇形果の出方等の試験をやりました。試験方法により結果の違いがわかります。イチゴの管理だけでなく、ほかの作物の栽培管理もやりました。班のメンバーはそれぞれ違った作物を担当しているので私はメロン、スイカ、ピーマンの班にも加わりました。

授業では野菜、花卉、果樹を作物別に授業を受けます。作物の原産地から主産地、品種、管理、収穫、出荷、更に農業経営、簿記、病理、植生、昆虫、化学実験、肥料、土壌、気象、農業機械等これ迄勉強したこともなかった科目ばかりである。

最初の6カ月は僕の不十分な日本語ではとても理解出来なかった。授業よりも日本語を覚えるのが必死でした。日々が過ぎて行く内に日本語も大分上手になり、授業もだんだんとわかるようになりました。一年経ち本校の一年生であった僕は二年に上がり、もう半年が過ぎました。全部を理解し満足してると言えは、うそでしょう。ただ自分の知識の範囲がこれ迄より格段と広がったことは確実で、経験的な実践に理論の裏付けが出来たと思っています。

一年半の研修がどれくらい成り立つかは、帰国後、学んだ技術を実際に生かし、その結果の成果によって判断出来るものと私は考えています。

## 6. 当初の研修計画と実際の研修内容とを比較して

当初の計画は近郊蔬菜の研修、特にイチゴの栽培についてでしたが、実際の研修は農業大学で

野菜、イチゴほか農業全般の科目の勉強が考えていた以上順調に出来ました。

#### 7. 合同研修会について

数少なく行われた合同研修会是我々研修生にとっては一番の楽しみだと思います。4月我々は見知らぬ国で始めて出合って、一つのグループとして1年半すごしてきました。この間に5回しか会ってない私達は、会った時には研修の成果、内容、生活、そして自己の反省と種々と語合って、良いチームワークですごすことが出来る非常に良い機会でした。

#### 8. 本邦での生活状況

わが国ではインフレが激しく、治安も安定してない。物価は日本と比べて見ると低い。けれど国民の所得も低い。農業作物の価格も安定してない。非常に高い時があれば、生産物を捨てる時もある。農業経営するには大規模で品質の良い物を取量多くとることが一番だと思います。

今からわが国の農業はますますむづかしくなると言われている。それだけに経営の合理化をはかり国のために、自分のためにも良い農業を続けたい。

#### 9. 今後の子弟研修制度に対する提言及び要望事項

子弟研修制度に対しては、出来るだけ研修生活費の増額を希望したい。他に制度への要望ではないが日本語の勉強もすること。自然と出来ることだが、出来るだけ早く友達をつくることが大切だと思います。それからわからないことはすぐ聞くこと。更に時間があれば日本国内を旅行して日本を良く知ること。いずれにしてもこの一年半を有効に生かすかどうかは、自分次第にかかっていくと思います。

#### 10. 所感（帰国後の抱負を含め）

1981年4月1日、日本語もあまり出来ないのに「行けばどうにかなる」と言う気持ちでブラジルを立ちました。初めてジェット機に乗る僕、見送る両親、兄弟、親せき、友人たちの気持、僕の気持、緊張いっぱいでも何口にも出ませんでした。成田空港に到着した日、春の冷たい風、道ばたには桜の花が私達を出迎えるように咲いていた。

海外移住センターでの10日間のオリエンテーション、先輩たちとの合同研修会で先輩たちの体験を聞いて注意すべき点など、それから初めての自己紹介、舌が纏れて言葉が出ない。

ハトバスで東京都内の観光、昔のお寺、お城、東京タワーなどの見物。日本の歴史を少し見たような感じがする。

知り合ったばかりの私たちは、皆んなそれぞれ各地の研修先へ行く日が来て、6カ月後また会える日を楽しみにして別れる。僕は四国の高知県で研修することに決定しており、初めて乗る新幹線あのスピード感を味わって心のおどる気がした。高知へ着き、県庁の方にお世話になって、翌日に入校式、外国から来ると言うことで皆んなにめずらしい目で見られていやな感じがした。

学生時代にもどって、違った国、違った環境で寮生活を1年半過ごした。3人部屋で初めのうちは僕の日本語は通用しないし僕も皆んなの方言がわからなくなかなかりとまどった。最初のうちは授業



もほとんどわからない。毎日毎日が机へ向かって日本語の勉強でした。日々が過ぎて行くと僕もなれて来て皆んなとなじんで来て、それからは机でなく皆んなと話して勉強するようになり、授業も大分わかるようになった。あまりにもこの間の経過がスムーズで、研修前の心配はだんだん消えていった。

当初は毎週たいくつであった日曜日も同級生のクラブに入って僕の大好きなサッカーをやりはじめた。試合がない時は観光地へつれていってもらって、友達の家にもいったりしてだんだんと楽しくなってきた。

間もなく夏休みが来て両親の里愛媛県へ行きましてはじめて日本の親せきに会い、おじさんとおばさんに九州へ連れて行ってもらってあそ山、桜島のような火山を見た。日本は台風、地震がある中で桜の花でいっぱい春、蒸し暑い夏、紅葉の秋そして雪で白い冬となんと変化の豊かな自然を大切にしている人々であることに気づいて、好感を持ちました。

夏休みを終えて後期に入りました。皆んなが熱心で勉強するのにつられてテスト前に徹夜で勉強もしました。そして12月、はじめて家族と離れてのクリスマスとお正月をおじいさんの家で過ごしたことは思い出に残るものでした。冬の富士山は雪をかぶって美しく、ポスターよりもきれいであった。

高知県には県費で来てる留学生が多く、機会のある毎に皆んな集まって色々と語り合いました。僕が日本へ来て一番感じたのは友達づきあいのむずかしさでした。良い友達は出来ましたが一般的に見ると自分の都合の良い時だけの友達が多い。例えばすれちがう時声をかけてくれる時もあるが他人のように顔もむけてくれない時もある。

機械化した日本、コンピューターの時代、世界一安全な国、母国より10年以上進んでいる日本、たしかに僕は日本の電気製品、車等に夢中になりましたが外国でのんびりした生活で育てられた僕には日本よりも人間的な社会という意味では母国がいいと思います。

何事を行うにも細かい点から計画的に行うこと、正確な時間的段取り、結婚式でも、宴会でも限られた時間にしばられ余裕がない。

若者は小学校、中学校、高校できびしい教育を授けて、自由時間が少ない。物価の高いため自由時間があっても楽しめない。

日本人の生き方ブラジル人の生き方それぞれの倫理的現実の違い。良し悪しは別としてもとまどうことが多い。帰国後の計画はもちろん農業を続けることです。学んだ技術を実際に取り入れ、応用しその後成果がでて来るものと思います。

日本の技術を違った経営規模、気候、土壌、色々と異なった点の中でどのように取り入れて成功するか問題はこれからだと思います。自分でやってみて、これが良ければ部落の農家にもおしえていきたいと思います。

農業だけでなく社会的な面でも身につけたことも部落の人々につたえたいし、また日本の現在の

状況をブラジルの多くの友達にも話したいと思います。

池田 悟アルマンド

1. 研修機関 (1) 前期 福岡高等職業訓練校電気科  
(2) 後期 三井アルミニウム工業三池事業所施設課, 電気係
2. 研修期間 昭和56年4月～57年9月
3. 研修職種 電気設備保守
4. 当初の研修計画

昭和56年4月～昭和57年3月迄福岡職業訓練校にて, 電気の基礎教育を受けました。

昭和57年4月～昭和57年9月迄三井アルミニウム三池事業所にて, 電気設備の保守, 及び配線実習の教育を受けました。

#### 5. 研修概要( 具体的研修内容及び成果 )

##### 1. ( 一年間職業訓練校で研修 )

私は, 4月17日に九州の福岡に有る, 高等職業訓練校電気科に入学し, 午前中は学科, 午後には実習の教育を受けました。学校で一番苦手だったのは「法規」で, その他の科目は自分なりに理解出来たと思います。

学校で一番楽しかったのは, 実習の時間でした。

一年間の研修成果として, 「電気工士」の免許が取得出来ました。この免許証は一生大事にし, 今回の研修の思い出となる事と思います。

##### 2. ( 企業での研修 )

学校を一年間で卒業して, 今度は企業での本格的な電気の研修に入りました。

私が実務研修を行った会社は, 三井アルミニウム工業株式会社でした。会社では, 電気係に入り, 教育を受けたのですが, 学校で学んだ事のないものばかりで, 最初のうちは, 驚きと不安一杯でした。でも会社の人々がとても親切に, 分りや



すく指導して下さいだったので、学校では学んだ事のないシーケンス制御回路でも少しずつ理解する事が出来、最終的には私自身で回路を考え、組み立てる事迄出来る様になりました。

それからと言うものは、研修が楽しくなり多くの制御盤の組み立ての他、電気設備の点検、修理の仕方等を習いました。

しかし、電気の分野はまだまだ広く、短い期間ではその第一歩をスタートするのが精一杯です。後6ヶ月研修を延長していただき、その間に二歩、三歩と習得していきたいと今、私は思っています。

#### 6. 当初の研修計画と実際の研修内容とを比較して

私の最初の希望は、日本のすぐれた医療器機関係保守整備の勉強をしたかったのですが、研修計画が変わり、実際は電気の勉強をした訳ですが、今思うと後悔などはしていません。反対に良かったと思っております。日本のすぐれた電気技術に一步でも入れた事を感謝しています。

#### 7. 合同研修会について

関西方面への研修旅行はプログラムとしては、申し分なかったのですが、あまりにも雨が多く期待していた旅行が出来なかったのが今でも心残りです。しかし、皆さんと会えてお互いに意見を交換し合い、ホテルでは「カラオケ大会」「ダンスパーティ」などで楽しんだ事が今でも頭に浮んで来ます。

#### 8. 本邦での生活状況

来日当初は、ブラジルとは全く違った国で、おどろきと不安で一杯でした。親戚の家に行くのに駅員に「どの電車に乗れば良いのですか」と尋ねると「君は私をからかっているのか」と怒られた事もありました。

又、寮の食事が殆んど甘く、なれる迄は毎日味噌汁などにはしょうゆを入れて食べたものです。学校では漢字の読み書きが、ほとんど出来なかったために随分と悩み苦しみました。一ヶ月、二ヶ月とたつうちに、生活や気候、その他にも慣れ、日本社会の仕組み又漢字も少しずつですが、理解出来る様になって来ました。

今では、会社の多くの人たちと交際し、多くの友人も出来ました。お金にはかえられない事を教わり、私にとってあらゆる事が良い勉強であったと思っています。

#### 9. 今後の子弟研修制度に対する提言及び要望事項

これからの子弟研修生は、おそらくほとんどが二世、三世が多くなると思うので、出来れば私たちと同じ二の舞をふまないためにも、現地で少しでも多く、漢字の勉強をして来たほうが良いと思います。それと研修期間が出来れば、二年間にしてほしいと思う。今までに多くの研修生が時間がたりなかったため、悔いをのこして帰国したのではないかと思います。

#### 10. 所感(帰国後の抱負を含め)

昭和56年4月3日、技術研修に母国日本へと、希望と夢で胸をはずませ、ブラジルを出発したのは、ついこの前の様に感じます。

生まれて初めて父母の生まれ故郷の土を踏み、もう一年半も経ちました。今振り返って思いますと、日本に着いた頃、桜の花が満開でした。桜の花には、日本人特有の純粋な心が残っているように感じられました。

日本に来て色々な事を学び、色々な人と出会い、色々な経験をしました。ブラジルで父達に日本の事を色々聞いてきましたが、今日の日本とは大きな違いがあり、例えばコンピューターやロボットなど、日本の技術の進歩にはびっくりしました。私達の国と比較すれば「雲泥の差」です。一刻も早く、遅れから近づく為にも、私はすぐれた技術を学びに日本に来たのです。

私は、ブラジルでは病院に勤めていた為、医療器械の保守、管理等を学びたいと思っていました。しかし実際は電気の専門学校に入学し、一年間電気の基礎技術を学ぶ事となりました。

昭和56年4月17日に福岡高等職業訓練校に入学し、約半年間は、日本の生活や、社会の仕組み、学校や寮の規則に慣れるのに随分と悩みましたが、反面楽しい事も数多く体験いたしました。しかし、実習の時間になると楽しく、学科では理解出来なかった事でも、実際にやってみると、良く理解出来ました。又、月日が経つにつれ、生活にも慣れてきました。

電気の勉強としては、おもに内線工事を学び、午前は学科、午後は実技をしました。

学科では、電気理論、電気機械、法規、送配電、及び配線設計等を、実技では金属管工事、磚子引き工事、ケーブル工事、トランス結線、等を行ないました。又、見学旅行には、佐賀工場、松下電器、八丁原の地熱発電所等に行きました。そして三井石炭四山抗にも会社の社員たちといっしょに行きました。

この一年間の成果は、「電気工事士」の免許が取得出来た事です。私は、まさか日本の国家試験免許が取れるとは思ってもみませんでした。

学校卒業後は、どんな研修先を紹介してもらえるか不安でしたが、三井アルミと言う会社を紹介していただきました。

三井アルミは、現在私がすんでいたベレンの近くに日本、ブラジル間での共同開発事業アマゾンアルミの建設、技術提供を行なっている会社と聞き、私はこの研修で自分の将来が決まるのではと思いい自分の出来るかぎりの努力をしました。

私は電気係に配属されましたが、学校で一年間学んだ事が、実際にどれほど役に立つか心配でしたが、やはり予想以上に現実はいきびしく、見る物、聞く事が初めてで、私は不安で落ち込みました。でも「このままではいけない」と自分に言い聞かせ、必死で電気係の人に聞き、又教えていただきなんとか図面の読み書きが出来る様になり、最終的には、制御盤の組み立て、機器の改造迄出来るようになりました。これまでに成れたのも電気係の人達のアドバイスと親切に色々教えていただいたおかげです。

本当に、この一年半の体験は、私にとって意義のある研修で、一生忘れられない思い出になります。

色々とお助言、御指導して頂いた訓練校の先生方、そして三井アルミの皆様方に心より御礼申し上げます。

そしてこの機会を与えて下さった国際協力事業団には深く感謝致しております。本当にありがとうございました。帰国後は、出来る事なら「アルプラス」に就職して、日本の皆様と一緒にブラジルのナショナルプロジェクトとしての仕事をしたいと思っております。

### 「日本の印象」

はやくも一年半経ちましたが、振り返って見れば何もかも思い出で胸がいっぱいです。

私が、父母の生まれ故郷である日本の土を初めて踏んだのは、去年の4月3日のことでした。私を感じたのは、まず人が多いことと狭い道を自動車があふかりそうに走っている事、そして東京ではたくさんのビルディングが立ちならんでいました。ブラジルでは、なんどもアマゾンのジャングルにはいった事がありますが、ビルのジャングルは始めてでした。またビルの上から眺めた町の風景はとてもすばらしく印象的でした。下を見ると目まいがするほど高く、人間はありのように見えました。また驚いた事は日本の地下街に入った時です。まるでありのすのうのようにたくさんの通路があり、思ってもみなかったほどの商店街や飲食店などが立ちならんでいました。欲しいものばかりが目につき、つい事業団にいただいたお金は使い果たしてしまい、生活にこまった事もありました。ほんとうにお金さえあればなんでも手に入る国だと思いました。今、世界で日本人が一番働き者だといわれています。たしかにそのとおりかも知れません。でもほんとうの理由は、あまりにも社会が進みすぎているために、競争が激しくなり、人よりも働かなければならないという実態にあるためではないでしょうか？/ともあれ、物を大事には、使っていないようです。古くなれば新しく買いなおし、道には所によってやまほど電気製品や自転車その他の物をすててあるのをみました。もし、ブラジルがもっとちかくにあるならば、生活の不自由な人たちにもっていきたいなあとと思った事もあります。日本人のぜいたくな生活を見ていると、うらやましいだけではすまないものを感じました。

日本へ来て一番楽しかった思い出は、1981年の冬に友達と鳥取県の大山にいき、生まれて初めてスキーをした事です。そしてあのまっ白な雪の山を見た時の印象は今でもわすれられません。また今年の夏会社の人や大牟田電設の人たちと天草の海辺にキャンプにいった事がとても良い思い出になりました。日本は海と山の自然豊かな国でその一端での楽しい思い出も作ることが出来たことは幸いでした。

1. 研修機関 (1) 前期 東洋食品工業短期大学  
(2) 後期 同上
2. 研修期間 昭和56年4月～昭和57年9月
3. 研修職種 食品加工
4. 当初の研修計画

私は今後、機会があれば、日本での食品加工を学んだ経験を生かしたい考えから研修のため訪日したので、研修の修得には一生懸命でした。従って、本当に良い勉強が出来たと思っています。

僕の家は、養鶏を行っています。農家は収穫したものの販売だけでは、商人、仲買人のいいなりになる危険がある。より有利な経営を目指すためには、農家がグループになり可能なものからでも加工し、より有利に販売することを考えなければいけないと思う。

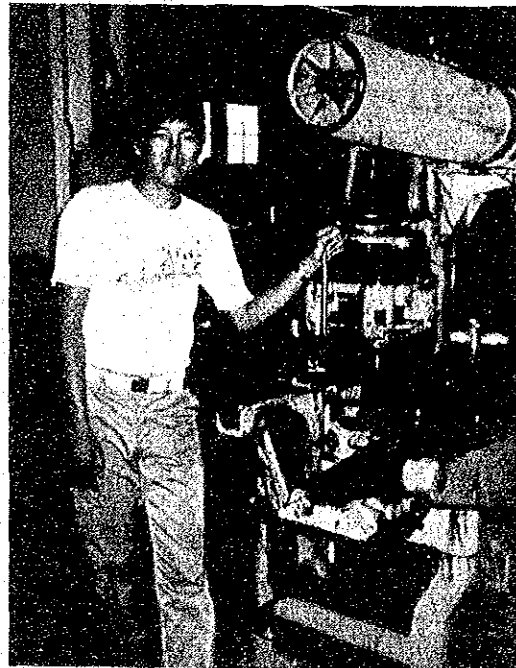
そのような考えから私は、ブラジル国ベレン市郊外の日本人農家グループから食品加工を学ぶ目的で研修することとなった。

#### 5. 研修概要( 具体的研修内容及び成果 )

入学して1年と6カ月になりました現在本校で2回生として勉強をしています。

1回生の時には本校で学んだ科目、一般科目としては文学、歴史、法学、経済学、数学、物理学、化学、生物学、缶詰概論、英語、体育講義、体育実技。つづいて1回生専門科目農産缶詰製造論、缶詰機械概論、缶詰機械実習、食品化学、分析化学、生物化学、品質管理、官能検査、食品容器概論、機械学、汽缶学。

2回生では英語、水産缶詰製造論、水産缶詰実習、農産缶詰実習、食料缶詰製造論、畜産缶詰製造論、缶詰機械実習、食品衛生学、食品微生物学、食品微生物実習、分析化学実習、卒業研究、冷温保蔵学、食品加工廃水論、同実習、缶詰関係法規、応用微生物学、機械製図、工場設計そして経営学、それ以外には1回生時キュービーマヨネーズへの3週間実習があり、そして2年目はM.C.Cへいきました。工場見学として1年の時東洋製罐高槻工場、和歌山県和歌山経済連桃山工場、そして11月には広島ヘジャム工場見学へいきます。



僕の住んでいるアマゾン地域は豊富な熱帯果物の生産が出来ますが、これを加工する施設がほとんどありません。

#### 6. 当初の研修計画と実際の研修内容とを比較して

考えていた以上の研修が出来たと思っています。

#### 7. 合同研修会について

合同研修会は同期の友達と、研修についての意見の交換や生活についてはげましが出来るだけでなく、ブラジル語で思い切り話すことも出来、ストレスの解消に良いし、また研修旅行は、美しい日本の景や文化、歴史にもふれることが出来るので非常に有効だと思っています。

#### 8. 本邦での生活状況

初めのうちは、切符の買い方、買物についても値段の判断、食事にしても何が良いのか、安いのか高いのかかわからず大変困りましたが、現在ではすっかり日本の生活習慣になれ問題はありません。

#### 9. 今後の子弟研修制度に対する提言及び要望事項

特にありませんが、これからもこの研修制度を続けて、より多くの方が研修出来るようにしてほしいと思います。

#### 10. 所蔵(帰国後の抱負を含め)

研修先であった東洋食品工業短期大学では、それぞれ立派な先生方から各分野の知識と技術の研修を受け、本当に幸せでした。学校の先生方には心から感謝します。

最初のうちは先生の講義は良く聞きとれず、またわからないことが多く、そのたび、夜、先輩、同僚からもう一度たずねて勉強するありさまでした。また、実習にしても、ものすごくきびしいもので、その時は大変な苦しみでしたが、今になってみると、この苦しさが一番なつかしく勉強になり良かったなあ、と思っています。それなりに僕も毎日、毎日少しでも勉強のこと、日本のことを解るようにと一生懸命努力もしたと思っています。

学校での一般の学科、実習の他に、僕は特にブラジルに帰ってから一番必要と思われる、水産の加工と果ものの加工について、特別な先生の許して勉強することが出来ました。グァーバ、クプアスー、マランジャ、ガラナーとジャム或はジュースとなり得る果ものが豊富なアマゾンで将来、缶詰あるいはびん詰などの加工場を作ることが夢です。今すぐに出来るものではありませんが、研修したことを必ず生かす努力はするつもりです。

その他、僕は日本の旅行もずいぶんやりました。沖縄の石垣島には実習をかねて1ヶ月旅行しましたが、日本の本州と沖縄の種々な違いに少しおどろきました。都会といなか程の違いを感じましたし、特に人間関係のむづかしさも感じました。

また、北海道にも旅行する機会がありました。5日間かけて函館から札幌、旭川、そして大雪山に迄行きましたが、北海道の土地の広さにはこれ迄の日本の生活からは想像出来ないものでした。

続いて網走、釧路、知床とドライブの旅は本当に楽しいものでした。小さい国ですが日本の沖縄から北海道迄の気候、風景、生活、食べものそして言葉と種々な違いのあることが旅行してみた印象でした。

最後に、この研修の機会を下された国際協力事業団には長い間、種々お世話になりました。そして、東洋食品工業短期大学の先生方、友だち本当にありがとうございました。

後 藤 新 吾

1. 研修機関 (1) 前期 職業訓練大学校  
(2) 後期 ①昭和電機エンジニアリング株式会社  
②富士電機製造株式会社(東京工場)
2. 研修期間 昭和56年4月～57年9月
3. 研修職種 電気機器学
4. 当初の研修計画

① 昭和電機では1982年の4月から6月まで3ヶ月間回転機について研修しました。

② 富士電機東京工場では配電盤について、のこりの3ヶ月研修してきました。

#### 5. 研修概要(具体的研修内容及び成果)

一ヶ年間に亘る職業訓練大学校での一般学習および実習を終え実務研修として、昭和電機ではモータおよび発電機を専攻テーマとして研修しました。そのほかいろんな事をしました。たとえば、エンジン(ガス、ディーゼル、ガソリン)についてもいろいろと学びました。またいろんな組み合わせもしました。ガスエンジンヒートポンプを組立た時、車のエンジンをガスエンジンに変更し、それにコンプレッサー、ラジエータ、ポンプといろんな物を組合わせて作りました。また51kWのダミーロードも作りました。

モーターについてはステーターのコイルまき、ローターとの組合わせ、線出。

発電機についてはモーターと同じようにステーターやローターのコイルまき、ニス付け、整流器ボックスの組立て、そして発電機との組合わせなど……

発電機にもいろいろあり、私が昭和電機で実習したのは同期発電機でした。またブラシレス(BRUSHLESS)についても少しできました。

こうしていろんな事をしていく間に3ヶ月の月日がすぎてしまいました。短い間でしたけれども楽しい研修ができてよかったと思っています。

7月から9月にかけて富士電機東京工場にて研修を行うことになりました。こちらでは配電盤、整流器盤、電圧調整器盤、A.V.R.(AUTOMATIC VOLTAGE REGULATOR)と色々な盤



について実習してきました。

初めは製造科に入り、約1ヶ月間盤の組立てをし、今は電気試験科にいます。こちらでは製造科で組立た盤をシーケンスに従って電気を流し試験をします。実際に電流を流すので少しこわいけれどスリルもあってとても楽しい毎日です。しかし、技術的には私にとってあまりにもむづかしく全部をマスターするにはたったの3ヶ月ではむりな事です。1、2年はかかります。でもこちらへ来て大変勉強になりました。

#### 6. 当初の研修計画と実際の研修内容とを比較して

私は変圧器について勉強をしたかったのですが、ところが日本に来て大学へ入り1年間いろいろ勉強している間に私は回転機とシーケンスについて学びたくなり希望を変更しました。

今私が実習している事と日本へ来る前の希望をくらべて見れば、少し変わっていますが私がブラジルへ帰って専攻したい科目の一つです。

#### 7. 合同研修会について

今回の合同研修会は京都への旅行でした。前の研修会とちがって皆もすっかり日本になれているようでした。

京都は残念ながら雨でした、でも皆と旅行ができるだけで幸せでした。今回でぼく達の最後の旅になるかと思った時とても悲しくなりました。この18ヶ月間いっしょによろこんだり、わらったりした友達ともお別れがやってきました。皆さんいろいろありがとう、またいつかどこかで会えるのを楽しみにしています。 A TODOS OS AMIGOS QUE AQUI DEIXAREI E AOS COLEGAS DE LONGA JORNADA MANDO NESTA, CALOROSOS ABRACOS E FELICIDADES MIL ADEUS.

#### 8. 本邦での生活状況

日本での生活は最初の一年間はとても苦しい毎日でした。来日してから間もないうちに、この知らない世界へ一人でアパート生活をする事になり大変でした。何もが私には初めてでいろいろ苦勞しました。何が私の口に合うのかも知らないから、いろいろ買って失敗した事が沢山あります。

お金の単位がよくわからないために高い物を買ったり、漢字が読めないためにへんな物を買ったりでした。いちいちスーパーの中で辞典をひくのは恥ずかしいし、だいたいで買っていました。

この苦しい毎日の中でも、いろいろ楽しい事もありました。今、後をふりかえって見ますといろんな面でも勉強になったと思っています。かえって楽な思いをするよりは、より強い思い出となることでしょう。

#### 9. 今後の子弟研修制度に対する提言及び要望事項

今後来日する研修生達にはできるだけ日本語の勉強をして来ること、漢字もあるていどできないと苦勞します。私のように字が読めないために自分が思うような研修ができませんでした。

事業団にはもう少し研修生達の希望に近づく研修先をお願いします。

## 10. 所感(帰国後の抱負を含め)

私はブラジルへ帰ったらまず最初には中退している大学を卒業することです。まだ3～4年かかりそうですから、就職の事は考えていません。

今私の頭の中には大学のことです。真剣に勉強に打ち込まないと皆についていけない、日本で過ごした1年半の後れを取り戻したいと思っています。

学校卒業後は日系の会社それとも発電所に就職したいと思っています。また父母が住んでいる所に水力を利用して自家発電で家に電気を付ける事が私の夢です。

私が去年日本に着いた時はとても寒くてこまりました。桜の花に囲まれて歩いた事は一生忘れないでしょう。

日本に着いて初めて電車に乗った時、日本人のあの忙がしさにはびっくり、また町を歩いていると何ものが初めてであり、あちこちで驚く事ばかりありました。道を守る車は逆方向からくるし、もう大変でした。

最初の一年は神奈川県相模原市の職業訓練大学校で勉強しました。初めのころはとても苦しかったです。友達をつくることでずら大変でした。日本人の性格わからなくどうしても皆の中に入ることができないまま4ヶ月が過ぎ夏休みが来ました。

私は、1ヶ月間大分へ旅行しました。自分が生れた所に21年ぶり帰りました。4才の時ブラジルへ渡ったことだし、ぜんぜん母国の事はおぼえていませんでした。でも親戚の皆がぼくの事をおぼえていてくれて、いろいろ昔話をしてくれてそこでぼくは初めて母国に帰ったとの実感をもりました。それまでは日本が自分の生れた国ではないような気持ちでした。

やがて楽しい夏休みが終り東京へ帰り、再び、あのつらい生活が始まるかと思った時もう学校へ行く気になれなかった。クラスに入り皆が話かけてくれた時はとてもうれしく、それがきっかけとなり、そのあくる日からは学校へ行くのが楽しくなりました。

講義については、少ししか学べなかった。本を読むには漢字が読めないのでは何もできませんでした。その点実習は心して学びました。

日本のような国で冬を過ごすのは、初めてでとても寒い思いをしました。冬の間はこたつに入り窓から外の雪がさらさら穏やかに空から落ちて来るのを見ながら感動しました。

この一年半日本で暮らし、いろいろ見学した後と私が言えるのは、日本人はとてもはたらき者で日曜日も休日もなく仕事をしていること、そして一面少し冷たいところがあります。でも友達になれば皆よい人ばかりです。研修が終りになって今やっと日本のよさがわかって来たような気がします。またいつか日本に来れることを楽しみにしています。日本の皆さんともお別れになりました。長い間ありがとうございました。

1. 研修機関 (1) 前期 群馬県立蚕業試験場  
(2) 後期 静岡県農林水産省果樹試験場興津支場
2. 研修期間 1981年4月～1982年9月
3. 研修職種 農業  
前期 養蚕 後期 カンキツ類

#### 4. 当初の研修計画

移住者子弟研修生に応募するに当って、

新しい近代的養蚕技術の導入について。

機械化導入による省力的農業経営について。

蚕の生理、形態について。

後期においては、カンキツ類について学びたいと思います。

#### 5. 研修概要（具体的研修内容及び成果）

前期研修は、群馬県にある県立蚕業試験場において、一年間蚕についての色々な面から見た勉強をしてみました。この試験場において、私が所属していた所は育蚕課、病害虫課、その他か時間を見て栽桑課などをまわり思いどおりに色々見ることができました。

この1年間のうち、4月から10月までは、各課についての実習期間となり、その課内で実習を行ないました。育蚕課では、ビニールハウス利用による経済的育蚕技術について、その他か気流を利用した藪質改善などこまかく教えてもらうことが出来ました。又その期間各農家をまわり養蚕の繭を見せてもらい、そのそれぞれが品種によってちがうのですが大きい差のあることにおどろきました。

病害虫においては蚕の生理を中心とした、試験を行ないました。農薬による中毒障害について、又ウイルス性軟化病生体障害についてなど、やはりこの時も外まわりにつれ出してもらい日本の農家を見ることができました。今の日本の農家では、兼業農家とよばれる農業経営をいとなんでいる農家が多いということがわかりました。そんな中で小さい養蚕農家ではまだ古いむかしのままの飼育している所が、数多くまだのこっていること。その反面新しい技術が導入され飼育面にも機械化されている所もあり、あまりにも大きなちがいが目につきました。

ただそんな中で今の日本の養蚕も外国からの輸入繭におされ困難な所があることをしりました。

#### 6. 当初の研修計画と実際の研修内容とを比較して

私は、希望どおりの研修先に行くことができ、勉強することが出来ありがたく思っています。ただ自分が日本にのぞんでいたこととは、あまりにもちがっていたため、なかなかとけこんで行くことができずとまどいました。日本での農業は機械装備された物と考えていたけれど、それは、ある

一定の面だけで内容はむかしと変らず省力的にまたは日本人の気まじめさで作り上げられていることがわかりました。

#### 7. 合同研修会について

日本に来て、ゆいいつの楽しみはなんといっても研修生の皆とありことが出来る合同研修会でした。そのため合同研修会の知らせがまちどろしく思つた時も数しれません。本当にいろいろとありがとございました。

ただ思いかえて見ると、皆とあえる機会は1年半の内約3回そして3度目にはもう別れです。そのためできればもうすし皆で話しあえる機会を組んでもらえとうれしく思います。研修旅行もできればお寺まわりでなく今の日本と語り物を見せてもらえると、とてもうれしく思います。

#### 8. 本邦での生活状況

日本においての四季の変化のすばらしさには目を見はる思いでした。ですがその反面自分の体の変化のきびしさ、はげしさのため、大変なやみましました。ひと夏の間におとつたり、やせたりたいへんでした。自分の場合は日本語を話すにたいしては、苦勞がなかつたために友人にもめぐまれ楽しい生活をおくることが出来ました。ただ冬のさむさはいちばんこたえたことと思ひます。

#### 9. 今後の子弟研修制度に対する提言及び要望事項

自分にとっては、このたびこの研修に参加させていただきほんとうにためになったと思ひます。今までのせまいからにとじこもらず、ひろい面から多くのことを学びとることが出来ました。

又おなじ移住者の中におなじ外国にて、自分だけのためでなく国のためがんばっている多くの若い力を見ることができ、今はほんとうにうれしく思っております。これからも出来るだけ多くの青年を研修させていただきたく思ひます。ほんとうにどうもありがとうございました。

#### 10. 所感(帰国後の抱負を含め)

昭和39年7月横浜の港から多くの人に見おくられてブラジル行の船にのり外国へと渡って行きました。そしてあれこれ18年ぶりに、今度は、事業団による移住者子弟研修生として今成田空港にておりたつ。そして今また1年半の研修をおえて帰国の日が一日一時とせまて来ている。それらのことを思いかえすと、色々なことが思ひかびまたなんとはやい一年半だったのだらうと思ひ。

私が知っていた思ひ出の中の日本



とはあまりにも変っていたために来てすぐには何も手つかずと有り状態でした。そして十数年の年月の速く長い日をいやと言うほど感じることが出来ました。自分の知っていた思い出のかけらはひとつもなく、ただ近代的に新しく出された物だけが目にうつるだけでした。こんな中でほんとうに生活して行けるのだろうかと思ひなやみながらも群馬県にある自分の研修先へと行きました。

日本に来てすぐ街だけを見ていた私も群馬に近づくにつれて田、畑が見えそして日本らしい風景に出あい、やっと日本にきている実感がわいてきました。群馬県についてそこで自分が前期一年間お世話になる所をこの目でよく見てみました。それは街はずれにある工場地帯のそばに大きくひろがる桑園の中でした。

私の希望の研修内容は、第一に新しい養蚕技術そしてそれを利用した機械化飼育技術でした。そのため群馬県にある県立蚕業試験場において一年間の研修を受けることは幸でした。県の中でも一番といわれるこの試験場において、私はそこに来ている学生と一緒に寮生活をする事になりました。そこで日本における養蚕の一年間の基礎的なことから順ぐりと教えてもらうことが出来ました。春の初めの桑園管理、植付、つき木、除草、施肥、などを中心にした実習をすすめて行く。

養蚕の期間は、育蚕課にて実習をすすめて行く。中心の試験としてビニールハウスによる経済的育蚕技術について、又気流利用による繭質改善をはかる試験をおこなって見ました。日本の養蚕農家においても中小規模農家においては飼育施設の改善に対して多く問題点が見られている。また土地の少ない農家には桑園拡大を必要としても、土地がないため、今ではそれに対する密植桑園の試験も行なっていた。これは今までの桑園にくらべ倍の収量が上げられるようになるという。これなどは県内で実用化されているという。またこれにより桑の刈取も機械化による省力化、能率化を上げることが出来るという。

飼料面では今、全国的に人工飼料の試験が行なわれている。今ではこれも実用化され稚蚕人工飼料として各県で使用されている。これは、今後、全部を飼育できるようになると思う。またこの



人工飼料のため、多くの蚕の品種が作られ、考えだされたという。

病害虫において学んだことは、蚕の農薬中毒に対する生理状態について、これについては自分が考えていた以上に蚕にも多くのていこう性があり、その日に農薬のかけた物を食べた時はすぐに結果がでるが、以外に強いとわかった。

夏蚕期において、私は農家に入っ  
ての実地実習を行なうことが出来

した。養蚕農家においても夏場はいそがしく、ちょうど麦の収穫と田植がかさなり、そのほかに蚕を飼育すると言うように、ほんとうによく働くと思いました。

自分がお世話になった農家では息子さん夫婦も家の仕事を手つだいみんなで農業をしていました。けれどもそのまわりの農家はみんな兼業農家で息子さんは外で働くといったぐあいでした。こうして一年半の間にあらゆる物を見、学ぶことが出来、これらのことを今自分はブラジルに帰りどのよう  
に自分の農業に組込で行くか考えさせられました。試験場で学んだことの面で省力的作業などまた  
密植桑園などは土地の少ない私にとってはおもしろい方法だと思っています。ですがこれを行な  
う前に今第一に行なう必要性におわっているのは、今老化してゆく土壤の改良だと思っています。  
それから日本にいる間にいろいろと多くの人の話を聞くことが出来た中で、今のブラジルの養蚕農  
家も、製糸会社との交渉を行なう上では養蚕農家でひとつのまとまりを作り、そしてその大きな団  
体でぶつかって行かなくては、今の時点ではただ製糸会社の思いどおりでまだまだ養蚕農家の要求  
は受け入れてもらえないものと思います。

なおこれらは帰ってすぐにはできる物ではなくすごく年月がかかるかも知れないができるだけ前  
に向ってすすんで行きたいと思えます。

なおこのたびの研修について国際協力事業団の皆様方および試験場および各農家の方々に深く感  
謝いたします。本当にありがとうございました。

石 東 寅 雄

1. 研修機関 (1) 前期 育成牧場(静岡県富士宮市)酪農, 肉牛  
畜産試験場( " ) "  
(2) 後期 菊のハウス栽培(静岡県湖西市)  
シクラメンの栽培(静岡県駿東郡長泉町)
2. 研修期間 昭和56年 4月~56年9月 育成牧場  
昭和56年10月~57年1月 畜産試験場  
昭和57年 2月~57年5月 菊の研修(農家)  
昭和57年 6月~57年9月 シクラメンの研修(農家)
3. 研修職種 (1) 畜産(酪農, 肉牛)  
(2) 園芸(菊, シクラメン栽培)
4. 当初の研修計画 (1) 酪農, 乳牛の飼育と日常管理

- (2) 肉牛，肉牛の肥育の方法
- (3) 電照菊の（栽培管理）
- (4) シクラメンの（栽培管理）

## 5. 研修概要（具体的研修内容及び成果）

### (1) 酪農について

農家と畜産試験場で研修を受けました。

育成牧場では各農家の子牛（乳牛）を預り15ヶ月位育成したのち、各農家に戻す役目をしている。ここでは200頭程度の子牛を飼っており、夏場には牧草地に放牧し、冬、早春にはサイレージ及び農耕飼料を与え育成する。夏には採草（オーチャードグラス、イタリヤンライグラス等）し、乾草、サイレージの方法を研修しました。又毎日子牛の管理では放牧地の決定（草の成長に合わせる）、病気（ピロプラズ等）対策、治療、除角の方法及び後処理あるいは、サイレージの与え方を研修した。

ブラジルでは全く経験ないことばかりなので大変勉強になりました。

### (2) 肉牛について

畜産試験場

この試験場では牛の試験だけであった。主に牛の人工受精、病気の研究、育成試験、検定試験、牧草試験等を行っているが自分は肉牛の肥育の方法について主に研修を受けました。

肥育のコツは、牛の運動量を適度におさえ、エサを与え、常に病気の発生をおさえることにあるが牛のためにはエサの食べ具合、体重の増減、表情など毎日の観察が大切なので、その見分け方を日々の飼育と合せ研修した。

将来ブラジルで肉牛を飼う計画があるので大変参考にになりました。

### (3) 電照菊の栽培について

研修先は、菊の専業農家であり、夏は露地、ハウス栽培を行い、冬場には電照を行う、研修期間は2月～5月であったため、丁度芽を取って、さし木を行い、2～3週間後にはハウス内のベッドに定植を行うという初期作業から行えた。定植後は、水管理、追肥管理、サビ病、ウドンコ病、対策のための消毒を毎日行った。その後には花芽の調節のピンチをしました。花市場までの束、箱詰めおよび出荷と言う具合に一貫した栽培管理技術の修得および出荷に至る迄の作業が体験出来たことは幸せであった。

### (4) シクラメンの栽培について

シクラメンの栽培について専門に研修を受けるつもりでしたが、夏場の研修であったため、シクラメンについては多くを学ぶことが出来ず、鉢上げを行い、多くの時間は他の草花、観葉植物の定植を行いました。シクラメンについては土造りが第一で土の消毒、9月には種まきを行なうところ迄にとどまった。全体的に毎日の作業が細やかで忙しく、ブラジルの都市近郊ではやれる

が、いなかの方では難しく思えた。

#### 6. 当初の研修計画と実際の研修内容と比較して

将来のために酪農牛の肥育を研修するつもりで計画を立て、農友会にも頼んでいたのですが、この研修を受けられ、思っていた以上の内容の研修ができました。また、畜産試験場では畜産全体について勉強することができました。その他期待をしていなかった園芸（花栽培）についても研修ができ、日本での細やかな気をつかう農業（集約農業の対応の仕方について）を学べたと思います。感謝と感激で一杯です。

#### 7. 合同研修会について

##### (1) 1回目は（静岡県伊豆）

同期の研修生が全員参加し、みかん狩り、ロープウェイ、水族館などの見学、そして温泉に入れたこと、ブラジルとは違う景色に大変楽しくすごしました。又ホテルでは仲間たちと研修について意見の交換を行い、はげまし合ったり、討議もしその後の研修を続けて行く上で役立ちました。

##### (2) 2回目（京都等関西）

日本の歴史の京都、比叡山、びわ湖、永平寺など日本の古い建築と、日本の歴史を見るような景色は感激で一杯で、今でも忘れることができません。今後の研修生にもぜひ見せて上げたいと思います。

#### 8. 本邦での生活状況

育成牧場では一室が与えられて一人で生活、食事は従業員と共にしました。試験場では官舎の一室を貸してもらい食事は他の研修生と寮で一緒にしました。農家では農家の家族の一員としてあつかわれ、家族的生活の中で過ごすことが出来ました。どこでも親切にしてくれましたので困ることもなく、過ごすことが出来ました。休みは映画を見たり、買物をしたり、たまには友達と旅行もしたり楽しくすごせました。

#### 9. 今後の子弟研修制度に対する提言及び要望事項

- (1) 研修のテーマをしぼってポイントを決めて行く必要があると思います。余り多くの計画をたてると成果が期待できない。農友会の研修生の場合少しこの心配があります。
- (2) 日本語をできるだけ勉強してゆくことが大切だと思います。

#### 10. 所感（帰国後の抱負を含め）

研修を受けた酪農を自分の経営計画としており、手始めに肉牛30頭程度飼育し将来は規模を拡大してゆきたいと思っています。また、機会があれば近所の青年達にも日本でのできごと、農家の生活、研修内容、日本人の農業経営に対するこまやかな神経の使い方などブラジルの農業と違う点を話し合いたいと思っています。農業の研修ばかりでなく生活面、言葉など日本の文化の一面についても学ぶことが沢山ありました。このような研修の出来ましたことについて心から感謝いたします。



1. 研修機関 (1) 前期 岡山大学農学部(花卉研究室)  
(2) 後期 農業組合法人香花園
2. 研修期間 昭和56年4月～57年9月
3. 研修職種 花卉栽培技術
4. 当初の研修計画

私はアルゼンチンにある事業団の園芸センターで半年間、日本から派遣されていた岡山大学の安井先生の元で研修を受けました。そこでカーネーションの茎頂培養について勉強させていただき、研修を終えてからは叔父の家で無病苗の育生に取り組んでいました。

しかしこれからはカーネーションだけでなく何か新しいものを取り入れる事によってより安定した営農が出来るようにしなければならぬと思ひ、そこで色々な花の培養、栽培技術を学ぶために国際協力事業団の研修生として日本に帰って来ました。

#### 5. 研修概要(具体的研修内容及び成果)

前期の一年間は岡山大学農学部花卉研究室で研修を受けました。大学での前期半年間には小西先生の植物発育論と花卉園芸学Ⅰの講義を受けた。植物発育論では園芸学の基礎となる講義で、植物が胚の形成から種子形成に至る生長の過程でさまざまな環境に接して多様な変化をおこす事が良くわかった。

花卉園芸学Ⅰでは、花卉の分類、繁殖(種子繁殖、球根繁殖、株分け、取木と接木繁殖、挿木繁殖、組織培養による増殖、無病苗の育生)、土壌管理、水管理、栄養管理、一般管理、開花調節などについての講義でした。

そして後期には花卉園芸学Ⅱの講義を受けた。この講義では特論に入り、バラ、キク、球根類(ユリ、フリージア、アイリスなど)、宿根草(カスミ草、スターチス)、カーネーションの栽培について基礎的な理論を学ぶ事が出来た。

その他に小西先生が出版されてる“カーネーション生産技術”の本について特別講義を受け、カーネーション栽培における土壌管理、水管理、栄養管理、病害虫防除、親株選抜方法などについて詳しく説明していただとても良い勉強になった。

5月の末からはカーネーションの水管理について実験を行ない、その結果夏場の水管理は非常に重要な事が良くわかった。それにカーネーションの二番花の電照栽培の実験を行ない、この結果処理区は無処理のものに比べ茎の伸長が早く芽のそろいも良く開花期も1週間早かった。

8月からは球根アイリス、ユリ、フリージアの促成栽培を行ないました。これらの球根類は開花後休眠に入り、自然開花は夏の高温を受けて休眠打破し冬の低温を受けてから伸長し開花に至る。それでこの実験では自然の高温を受けている八丈島の球根を使用し冬の低温を人工的に冷蔵庫で3

℃の温度を35日間あたえて定植したら自然開花のものより2ヶ月早く開花する事がわかった。そして球根類の繁殖についてはユリのリン片繁殖とフリージアの組織培養による増殖について実験を行なった。

私が希望していた無病苗育生の技術(茎頂培養)についてはキク、宿根カスミ草については実際に行かない身につける事が出来た。又球根類、ランの培養についても基礎的な事を学ぶ事が出来た。



後期の4月からは実地研修として香川県の香花園と言う所でカーネーションの栽培について研修を受ける事になった。真鍋氏を組合長に農業組合法人香花園として近代的カーネーション生産を行なっていて、アルゼンチンではとてもまね出来ない様な大設備である。

香花園では育苗部と切花に分かれていて、私は月～水曜日を育苗部で

そして木～土曜日は切花の方で研修をして来た。日本とアルゼンチンでは気候も環境も違うのでそっくりそのまま日本での栽培法を持ち帰る事は出来ないが色々な面で応用出来る事は沢山ありました。

#### 6. 当初の研修計画と実際の研修内容を比較して

この一年半の研修では思ってたより多くの花の栽培について勉強する事が出来た。それは岡山大学の小西先生がアルゼンチンへ一年半の期間で指導に行かれてたので現地の状況を良くご存知であったからでもありましょう。だからアルゼンチンの気候にあった花、又は栽培法について希望以上の研修を受ける事が出来たことは私にとってこの上ない幸せなことであった。

#### 7. 合同研修会について

大学での研修を始め最初は日本の習慣それに大学での専門用語になれず大変苦労しました。そうした中で半年間の研修が終り、合同研修会の通知を受けた時はとても嬉しかった。

合同研修会では先輩たちとの意見交換会で11回生の皆さんの問題点として先輩たちのアドバイスを聞きとても良い参考になった。研修旅行は伊豆長岡と夏期には京都、滋賀県のびわ湖、石川県片山津などへ行く事が出来、そして私たち11回生の仲間とも心が通じ合い皆んなと友達になれた事がとても良かった。

#### 8. 本邦での生活状況

私は3才の時に両親に連れられて南米へ渡り18年ぶりに祖国日本の土を踏む事が出来ました。それまでには親や友人たちの話で日本の事を頭の中で描いていた。しかし実際に今回日本に生活して

みて日本はとても進んでおりただ全てに驚くばかりでした。

最初の一年間は岡山で下宿生活をして来ました。ここでは岡大生と理大生8人が下宿していたのですぐに友達が出来とても良かった。下宿の友達には毎日夜に大学の講義でわからなかった所を教えてもらったり、休みの時には遊びに連れて行ってもらったりしてとても楽しい毎日を送る事が出来た。

後期には高松で日本の農家の生活を過ごしました。ここでも真鍋さんがとても暖かく迎え入れて下さり、そして仕事の事についても詳しく説明していただき充実した毎日が送れた。

#### 9. 今後の子弟研修制度に対する提言及び要望事項

私はこの一年半を通じて順調に研修を受ける事が出来たと思いますので別に提言としては特にながいが強いて言えば合同研修会などに参加して感じた事です。当初の研修科目と実際の研修内容とが全然違っている研修生が居た事、又はお世話になっている研修先では自分の希望した事についてあまり詳しい事が学べないと言う人がいたのでとても残念な事だと思った。従って今後の子弟研修生にはこう言う事がないように研修計画そして研修先について詳しく調べてほしいと思います。

#### 10. 所感(帰国後の抱負を含め)

この研修期間に大学、そして多くの農家を見学し、又実際に農家に入り体験して来て、日本は園芸の分野でも大変進んでいる事を強く感じた。

全国の都道府県に園芸試験場、農業改良普及所そして大学があつて色々な花について新しい栽培技術が研究され、その研究成果が各農家で取り入れられ実用化されている。

アルゼンチンではこういった園芸に関する研究はまったく行なわれていないのでとてもうらやましく思う。反面、現在日本の花卉栽培者はこういった栽培技術の改善、又作型の多様化、園芸資材の改良、開発によって大量に均質な花が栽培される様になり、花の高値が望めないと言う事が現状のように思われます。

この対策としてこれからの花卉栽培者は花の安値安定化を計り、需要を増大させて行く事が必要な事を小西先生から強調されました。それにはやはり経営規模の拡大が必要であり、そのためには、作業の単純化作業能率の向上、機械化、装置化による省力化、合理的栽培による生産の安定化などが必要である。

こう言った花卉生産の近代化による安値安定化はこれからアルゼンチンでも大きな課題になる事をつくづく感じています。だから帰ってからはこの一年半の研修成果が少しでも移住地の為に役だてる様に努力して行きたいと思っています。

最後になりましたが研修期間中色々、御指導頂いた岡山大学の小西先生、安井先生、景山先生そして真鍋さんをはじめ香花園の皆様方に心から厚く御礼申し上げます。又この機会を与えて下さった国際協力事業団の皆様ほんとうに有りがとうございました。

## 伊佐ラウル・エドアルド

1. 研修機関 (1) 前期 岡山大学農学部花卉研究室  
(2) 後期 兵庫県三木市志染町戸田 花卉栽培農家〔馬勝様方〕
2. 研修期間 昭和56年4月～57年9月
3. 研修職種 花卉栽培
4. 当初の研修計画

私は日本でカーネーションやキクや草花の栽培を学びたいと思いました。それと今アルゼンチンで問題になっている苗が腐ったり、病気になったりしている事も勉強しようと思いました。

5. 研修概要〔具体的研修内容及び成果〕

私はアルゼンチンから日本へきてもう一年半になりましたので、このレポートに学んだことを書くつもりです。

私はおじいさんの国(日本)に勉強しに来るように決った時、自分で約束をしました「日本についてから出るまでみじかい期間だけれども一生懸命勉強をしたい」と思いました。

アルゼンチンを出る時、まさか日本とアルゼンチンとは気候とか人間とか町などこんなに違うとは思えませんでした。もう研修が終りになったがいろんな事を覚えてとてもよかったと思います。そしてこの機会を作って下さった国際協力事業団の人達、どうもありがとうございました。

昭和56年4月3日。アルゼンチンから第11回移住者子弟技術研修生として初めて日本の土をさわった。

一週間を横浜の海外移住センターでオリエンテーションをしてから岡山県にある岡山大学農学部花卉研究室で一年間勉強をしました。

小西先生、安井先生と景山先生の講義を受けました。

6. 当初の研修計画と実際の研修内容とを比較して

アルゼンチンから出るまで、私は日本語をあまり話せませんでしたから、勉強をできるかな…と心配していました。

はじめの2カ月ぐらいあまりわからなかったけれども大学の人達や先生方、やさしく色々教えてもらってはやくわかるようになりました。大学で色々実験をして、講義を受けて、自分で覚えたかった事を勉強しましたのでよかったと思います。

また、農家に入って、日本のキク栽培の色々やり方を覚えたので勉強になったと思います。

7. 合同研修会について

この一年半に江の島や東京や京都などへの研修旅行があり、大変よかったと思います。少しでも日本の歴史、文化にふれることの出来たことも良い思い出となりました。

## 8. 本邦での生活状況

アルゼンチンから出るまえに、日本人がどんな生活するんだろうかな……と心配していました。けれどもはじめての一年間は岡山で下宿していましたので、とてもいい生活でした。いろんなところへおばさんや友達につれて行ってもらって、一緒にスポーツなどをしてとても楽しい一年間でした。その他に大学の先生と研修室の人達と一緒に農家見学に行ったり、花の市場へ行ったりしましたのでよかったです。

最後の半年は実習で農家へはいりました。ここで毎日毎日仕事をしながら普及所の先生方と話したり、試験場の先生方と話したりしてとても勉強になりました。その他に馬勝さんと一緒に近くの農家の色々な栽培方法を見学しても勉強になりました。

## 9. 今後の子弟研修制度に対する提言及び要望事項

日本に来るまえにアルゼンチンの事業団から研修の内容について詳しく説明する必要がある。

大学に行く研修生は下宿代や食事代にお金がいるので農家に入る研修生より給料をふやす必要がある。「ゆりかり」には氏名 しかなく書いた人へ連絡したくとも住所がないので連絡先をおしえる必要がある。

## 10. 所感（帰国後の抱負を含め）

この一年半には日本でいろんな事を覚えました。まずキクとカーネーションの色々な栽培方法を学びましたのでアルゼンチンに帰ってからもう一回おじさんのところ行って、そこで農家の皆さんに私が覚えた事を教えようと思います。

それから一人で花栽培をするつもりですけれどもこの一年半にはアルゼンチンはずいぶん変わったのでむずかしすぎるようだったら花屋を始めようと思います。

小西先生の植物発育論と花卉園芸学ⅠとⅡと安井先生の施設園芸論を受けました。そして、小西先生からカーネーション生産技術の本をくわしく説明してもらいましたので、アルゼンチンと日本の栽培方法の違いがはっきりわかり、盆栽の仕立て方も教えてもらいました。



また、その他いろんな実験をしました。4月には被覆資材の種類によってカーネーションの茎の堅さや花の色がどう変わるかについての実験をしました。この実験でアルゼンチンで使ってるビニールが一番いい事がわかりました。5月にカーネーションの挿苗の重さを4 gr までと4～6 gr と6～8 gr に分けて植えました。4 gr の苗は小さすぎて花

の咲くのが遅くなり、8 gr も大きすぎてちよっと遅く咲きました。やはり6 gr の苗が一番いい事がわかりました。そして一番花が咲き終わった6 gr 苗のカーネーションを用いて11月に電照の実験を始めました。一つの箱は電照をせずとも一つの箱は毎日4時間ずつ電照しました。電照した方はしなかったものより開花が1カ月早かったけれどもわき芽があまり出なかったので少し問題があると思います。また、6月にはテンシオメーターを使って水の実験をしました。

菊の実験はやらなかったけれども研修室の人たちと8月に露地に植えました。それは11月に菊を売るためです。また安井先生と農場で菊とアイリスとフリージアとユリを植えました。これは正月用です。他に草花を植えました。栽培するためにだけでした。作った花はキンセンカとストックとマリーゴールドとガーベラなどでした。

最後の半年を兵庫県、三木市志染町戸田にある馬勝さんの農家へ入って日本の菊とスプレー菊の栽培を勉強しました。

ガラス温室(スプレー菊)	13a(1,300m <sup>2</sup> )
ビニールハウス(輪菊)	20a(2,000m <sup>2</sup> )
露地菊(スプレー菊)	10a(1,000m <sup>2</sup> )
露地菊(輪菊)	35a(3,500m <sup>2</sup> )

この農家に入って、一年ぶりに仕事をしたので体のあちこちが痛くなりました。けれども花栽培が大好きだからとても楽しかった。

今年の4月中旬に露地で夏菊を植えました「7月と8月に咲く菊です」。

5月下旬から7月上旬まであまり雨が降らず気温が高かったのでつぼみかはやめについたのに水をとったり液肥をやったりしました。それでも早く花が咲いてしまいました。だから8月に咲く花が7月に咲いてしまったので7月は出荷量が多く値段が安くなり8月のお盆の時は出荷量が少なくて近年にない1本200円という高値になりました。咲くべき時期に花が咲かなかったりすると値段の差ができるという問題があります。7月上旬に露地にスプレー菊を植えました「10月～11月に咲く菊です」とこの菊は7月中旬の雨と8月の台風で沢山かれました。今年は変な気候だったので悪い栽培ばかりでした。温室の方にはスプレー菊の周年栽培をやっています。この温室は構造改善によって昨年に建てられました。

しかしその温室は土が粘土質のため排水が悪く大変作りにくくて困りました。今年の4月にはシールド栽培の菊が植っていて、それを6月に出荷しました。そして8月に植え変えをしました。これは電照栽培をするためです。

植えるままに堆肥や黒土を入れたりして土づくりをしました。やはりよい土になるには4～5年かかるみたいです。

またビニールハウスには6月に咲く菊を植えてあったので出荷が終ってから土の消毒をしました。それから正月用の電照菊栽培をしていました。

日本へ来て一年間岡山大学で学び、またあとの半年間農家で学び色々な事を覚える事が出来てと  
もうれしかったです。

学びたい事はまだまだ沢山あるけれどももう帰国の時期になってしまいました。この一年半にお  
世話になった皆さん方本当にありがとうございました。アルゼンチンに帰ってから力いっぱい仕  
事にがんばりたいと思います。

国際協力事業団 グラシアス、ムチャス グラシアス ポールブリンドルノス ア ノソトロス、ホ  
ベネス ラティノアメリカノス ラ・ボンビリダー デ エストウディアル イベルフェツシオナ  
ルノスエン エステ プラン バイス。

矢野真次

1. 研修機関 (1) 前期 福岡県農業総合試験場園芸研究所  
(2) 後期 愛媛県果樹試験場
2. 研修期間 昭和56年4月～57年9月
3. 研修職種 果樹(柑橘)
4. 当初の研修計画

56年4月1日バ国を出発、4月3日成田空港に着く、横浜にある移住センターで12日間オリ  
エンテーションを受けた後自分の研修先である福岡県果樹試験場に配属された。当初私の研修計画  
は、①には早く日本になれる事、②友達を作る事、③柑橘研修A栽培管理、B剪定、C接木などで  
した。

#### 5. 研修概要(具体的研修内容及び成果)

研修概要を具体的にまとめると、81年4月から82年の9月までの柑橘栽培技術の1年6ヶ月  
となる。それを四季ごとにまとめてみると次の通りである。

4月(春)植え付け、剪定、接ぎ木、施肥。5月圃場内温度調査。ハウスミカン、ネーブルの摘果、  
薬剤散布(ウイルス系及び害虫)圃場整地。夏(6月～8月)害虫防除、摘果、除草、夏は害虫が  
多く週1回薬散をする。摘果は早生、普通温州がおもです。又、草がよく伸びるため除草をする。  
除草剤を使用すると20日ほど入手がいない。秋(8-10月)薬散、摘果、早生温州の収穫、  
秋肥施肥。薬散(害虫及びウイルス、カイヨウなど)。および最後の摘果である。又、極早生温州  
(露地物)の収穫、秋肥に付いては、言えば冬のためです。冬(11～2月)温州ミカンの収穫選果。  
晩カンの収穫普通温州の剪定。本格的なミカンの収穫期です。後に晩カンの収穫に入る2月ごろか  
ら早い所では普通温州の剪定に入る。ここまでの前期研修先での1年でした。

4月7日より愛媛県において研修する。4月-9月までの6ヶ月間です。ハッサクの選果。伊予



柑の選果、接ぎ木など愛媛県ではおもに高接ぎをしていた。台木はキコク、中間台木に温州と言った方法である。又おもにネーブル、マーコット、レモン類と言った外国導入品種である。高接ぎはなかなか順調な成績でした。6.7.8月は、柑橘の1回、2回目の摘果であった。9月初めに伊予柑の最後の摘果でした。8,9月の除草に付いておもに除草剤を使用する。グラモキソン、ラウンドアップ、ジウロンと言った除草剤を使用した。よくきく薬で、特にグラモキソン+ジウロンを混合剤が最も効いた。自

分の国に帰っても除草剤試験をする予定です。

#### 6. 当初の研修計画と実際の研修内容を比較して

私の当初の研修計画は植え付け及び成木の剪定、接ぎ木と言った果樹栽培であった。しかし、私の入った研修先は全圃場が出来て新しいため成木の実習がでなかった。しかし、圃場作り及び植え付けは思い通りに実習できた。

後期に入り試験場をvari四国愛媛試験場に移る。半年間であったが伊予柑温州の成木の実習が出来た。しかし残念な事に収穫及び分析の時期が10月-12月と言ったため愛媛には涙を飲んで別れる事になる。もし11月末日まで延期できれば福岡県果樹試験場で果実の分析方法を更に修得したいと考えています。

#### 7. 合同研修会について

私達の合同研修会は、1年半の内に5回ありました。

4月、私達が日本に着いた時、10月前年の研修生(10回生)修了式翌年の4月後期(12回生)研修生、日本入りの時、8月私達後期研修会。10月の修了式となる。その内3回は、研修旅行である。この研修会は現在の日本を知ると言った面で非常に勉強になったと思います。

#### 8. 本邦での生活状況

81年4月~82年3月末日まで福岡県での研修の間、アパート住まいで1年間自炊生活を行った。日本での生活環境は全て便利にできていると思った。全ったく合理化されているがその分生活費がかかる。

82年4月より愛媛県で研修の場合。試験場には宿舎が無いため、農業大学寮寮に入れてもらった。寮と言えば給食があるので朝と夜食をたのんだ。昼は試験場で弁当を取った。このように後期は自分の時間も多少出来、その分見聞を広めることが出来た。

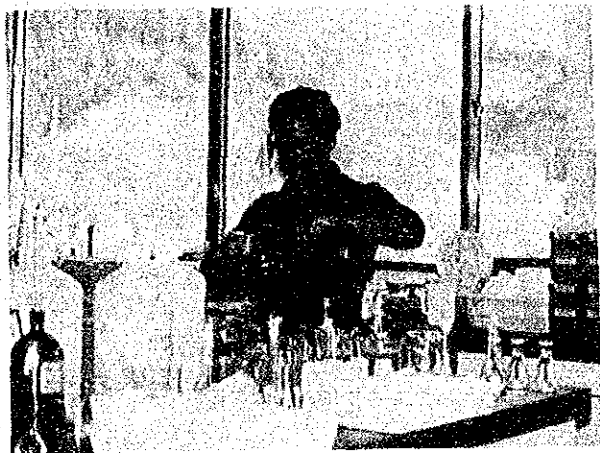


## 9. 今後の子弟研修制度に対する提言及び要望事項

今後の子弟研修制度に対する提言及び要望事項は特にないがただ1つ思い当る事を述べれば、要望事項として日本に帰国当初のセンターで国語辞典及び和、西、和、ポルトガル語辞典などを予め用意していただけると暫く心強いと思います。今後とも子弟研修制度を末長く続けてください。

## 10. 所感(帰国後の抱負を含め)

私の移住地は昭和35年から入植が始まりました。私達家族4人入植したのは翌年の昭和36年8月2日でした。入植地はバグアイ国イタブア県ピリヤピスタ郡アルトパラナ移住地と言った日本人移住地でした。私の幼いころの記憶では、当時移住地には、赤い大きな道路と移住者用宿舎と大きな倉庫があったと思います。それと原始林がどこまでも続いていた。土壌はテラロソアと言う赤土で雨など降ると車は走れなくなる様な土でした。入植から10年父母たちは色々な農作物を作り試験しました。私も17才になり逞しい青年になっていました。子供のころから親と一緒に農作業をしていたせいとか土いじりが好きで自分で色々な種子を蒔き交配させ新品種を作っては喜んでいました。それから10年移住地は雑作、養蚕がおもて農家もおちついたに見えたが雑作専業農家では、大豆、小麦の2本立てで土地は広大な面積を耕作するが肝腎な農作物の値段が今一つと言った所でここ数年横這しているため農家は資金繰りに苦勞している。又ある農家はせっかく広げた土地を借金返済のため手放す家も多くなった。又養蚕家も同じく繭価が横這しているのに対して物価が上がるばかりで養蚕専業では経営がなりたたなくなってきた。このころ(時)でしょうか、私はいつも、なにかこれらに変わる作物はないかと色々気を付けていた結果おもしろい所に気が付いた。各農家は主食となる米、野菜は作っているが果物は全部買って食べている事だった。果物の種類では、ネーブル、マーゴット、リンゴ、ナシ、バナナなどである。これら外国産は値段が高いわりに品物はあまりよくない。しかし、農家はよく買って食べていた。私はなぜ早くこの様な事に気が付かなかったかと思った。私の家では家の回りに自家用に色々な果物を植えていたためか農家の人達が果物を買って食べているなど気付かなかったのです。私が本格的に果物栽培をしようと決心したのは昭和55年の秋4月だった。果物栽培に関するデーターを調べ自分の移住地の気象状況を調べて見ると柑橘類が良いと分かった。しかも柑橘だけじゃなく落葉果樹にも良い事が分かったが肝腎な栽培技術が分からないため、なにかない物かと思案していた所に新聞を読んでいると、国際協力事業団の移住者子弟技術研修生募集の新聞を読んだ。早速移住地にあ



るアルトバナ事業所に応募しました。翌年の3月良い通知をもらい、無事合格したと聞いた時よし俺はやるぞと心の中で誓った。

4月1日バグアイ国際空港より研修生3名は、事業団の職員の皆さんに見送られ私達3名を乗せた、ジェット機は一路日本へと飛び立ちました。4月3日11期生18名は無事成田国際空港に着き、空港より横浜にある移住センターへとバスで直行しました。20年ぶりに見る日本なぜか日本に帰って来たと言う実感がわかなかった。なんだか外国に来ている様だった。4月13日福岡県果樹研究所で研修が始まる。

私は、柑橘、常緑部に入った。この試験場はまだ新しく、場所変りして3年目でした。圃場はまだ荒れていて草刈りなどはカマ、手動草刈り機と言った道具しか使えない状況でした。幸いにして私は機械扱いが出来るので小型コンボに乗り圃場整備をしながら植え付けの自習をする。又場長始め技術員の先生たちはとても親身に教えていただき、3ヶ月ほどで農大生に指導できる様になっていた。月日が立つのは早い物で気が付くと1年が終ろうとしていた。1年を振り返って見ると色々ありすぎるぐらいのことを学んだ。有る時は雪の降る中で晩柑の収穫などもあった。しかし、まだ研修不足な点も沢山有った。成木の栽培技術がのこっていた。福岡県の試験場では先に述べた様に圃場が新しいため成木が無いのでこの試験場に居る事は意味がないように思えたため、場長にお願いし、愛媛県下の試験場への推薦を頂き事業団支部に話した上で正式に移動することを決めた。後期研修会の後四国入りし4月7日より愛媛県立果樹試験場で研修に入る。ここでは成木の高接ぎをやっていた。普通温州に外国導入品種を接ぐ方法である。月日の立つのは早い物で気が付くともう半年が立っていた。福岡県とは別な研修が出来たし成木に付いても先ずは一通りの事が研修出来ました。ただ気残りの事は果実分析の実習であるこの問題は、10月-11月に福岡県果樹試験場で実習したいと思う。

私の帰国の計画として、私がやらなければならない義務は果樹栽培(技術)指導ではないかと思う、自分が日本で学んだ事を移住者仲間に指導しすこしても移住地全体が住みよい所にしたいと思う。(移住地のために働くことは自分のためでもあと私は思う。)

私の夢(ちょっと大きすぎるかもしれないが)先ず移住地全体がいつも新鮮な果物を食べれる様にし、量が増えてくると、農業組合か果樹生産組合かで町の市場に出荷したい。又もっと量を増やし隣りの国アルゼンチン(今バ国とアルゼンチンを結ぶ。友情の橋が吹きつつあり、5~8年後には完成するであろう)の市場へも出荷したい。又隣りの国ブラジル(移住地とブラジルに通る国道が5~6年後には完成する予定。)の市場にも出荷したいと私は希望と夢と使命感に燃えている。

1. 研修機関 (1) 前期 高知県立実践農業大学校  
(2) 後期 前半同上, 後半果樹試験場
2. 研修期間 昭和56年4月～57年9月
3. 研修職種 果樹栽培および農業全般
4. 当初の研修計画 果樹栽培および加工
5. 研修概要(具体的研修内容及び成果)

56年4月14日より特別研修生として農業大学校に1学年として入校し果樹専攻生として園芸学科に籍を置く。授業内容はほぼ毎日、講義で半日実習であった。合せて1日6時間の授業である。入校当時はオールラウンドとされ野菜、花卉、果樹のいずれの専攻生も同じ作業を行ない、6月に入ってから専攻別に分れて各部門の担当につき、その分野での実習を行なった。

講義については植物生理学、病理学、化学、作物、野菜、花卉、果樹等十数科目の内、野菜各論花各論を除いて全て受けた。当然テストも受け成績の方は決して良くはなかったが、およそ中の上であった。11月の末に当初からの念願であったジュースの製造法を学ぶため、農家、岡浩之さん方に住み込み研修を行なり。まずはみかんの収穫からと温州みかんの収穫を手つだい、そして選定、貯蔵を行ない商品にならないのを原料に使用してジュースを造る。

4ヶ月近くの農家研修を終えた後、4月の合同研修会に出席し、以後農業大学校2学年として再び学校に戻って勉強するが、やはり果樹を専門的に学びたくて特別に果樹試験場での研修を認めて頂き、7月より試験場で研修する。主に柑橘類を専習し、接木、剪定、摘果などの指導を受け、また論文のテーマの柑橘のウイルス病についての研究調査に力を入れる。成果としては一口には言いきれないがますますであったと思う。今後、実地でどう生かせるかが問題だ。

#### 6. 当初の研修計画と実際の研修内容を比較して

今までに、計画どおり物事が進んだ事はあまりないが、今回も同様のことが言える。それでも60%は計画どおりであったと思う。残りの40%は自分の努力の足りなさや期間が短いこと(特に果樹の場合)でしょう。



果樹試験場にて

カンキツのウイルス病の研究右側2人はケニアの研究生

## 7. 合同研修会について

まったく異議はないと思います。6ヶ月に一度全員が顔を合わせるのが研修中、最も大きな楽しみの一つであり、またこういった機会がまったく無いとしたらおそらく誰も最初の一年間は耐え切れない事だろう。センターの中間研修にしろ、研修旅行にしろ最高の思い出とエピソードを経験することができた。

## 8. 本邦での生活状況

一口にはなんとも言いがたい。というのは自分の場合、何度も研修先を移転し、もちろんその度生活状況もいちじるしく変わったからです。

大学校にては寮だったので生活費は極めて安かったけれどもまるでカゴの中の鳥的な日課であったため、ストレスばかりがたまる一方であった。

農家では、はるかに自由もきき、食事については言うところなく、また家族の一員として扱ってくれ文句のつけどころは皆無でありました。最後の3ヶ月間はアパートを借りてまったく自由気ままな生活をしたので今までのいづれの場所よりも快適だったが反面、生活費は数倍もかかった。

## 9. 今後の子弟研修制度に対する提言及び要望事項

研修生の受け入れを受け入れ側に依頼する際に制度の趣旨を予め詳しく説明しておいてほしい。でないと誤解を生む可能性が大である。たとえば前期、後期の区別をハッキリと受け入れ側に知らせておいてほしい。

## 10. 所感(帰国後の抱負を含め)

この9月末日をもって研修満期になる訳だけれども、総ての過程を終えて先ず、考えられるのは果して成果は上がったか、と言うことである。そのため、先づこの1年6ヶ月間を振り返って見たい。11期生全員、成田空港に着いた時は春とは聞いていたけどまだ肌寒くまるで冬を思わせるようでもありましたが、それにも増してバスでセンターに連れられて行く際、さてこれからどんな所へ連れて行かれるのだろうかと内心、不安で一杯でした。おそらく皆なも同じ気持ではなかっただろう。しかし、センターに着いてからの10日間というものはオリエンテーションスケジュールは非常に良かったし、また東京見物などに連れて行ってもらい、仲間とも完全にうちとけてあまりにも楽しかったせいとかまだ旅行気分が抜けずにいたよりであった。研修先である高知県立農業大学校に着いてからは気持が一変して、ああ俺はついに日本に来たんだな、しかも旅行や遊びに来たのではなく、勉強をしに来たんだな、との実感を痛切に感じました。

農業大学校に入学してからというもの寮だったので自宅やセンターの生活とは一変して毎朝6時30分に起床、点呼、清掃と目まぐるしくそれにも増して普通の生活では考えられない様な規則に基づいての日課。果してこれで耐えてゆけるのだろうか不安と、とまどいの毎日でしたが、それでも一般の学生達の一部には親切な友達もあり、色々とめんどうを見てくれたり話し相手にもなってくれたり、本当に良くしてもらいました。

また、素晴らしい担任の先生にも恵まれて実習においてはさほど勉強になったとは思えないけれどもそれなりに楽しく、かつ、ある意味ではプラスになったのではないかと考えています。大学校においては実習面では、当初の期待を裏切られた面もあったけれども、専攻であった果樹も含めて農業全般の基礎理論学習についてはおそらく他の研修機関などにも退けはとらないものが学べたと思います。何処で勉強するにしても最後はやる気次第である。

いずれにしても私はやる気だけはありました。特に、前期の前半には授業中には真剣に講義に聞き入り、ノートもきちんと取り、夜はそのノートを読み返したり、教科書を読んだりしたものです。そのおかげかどうかは別として、テストの成績は中の上と学歴のハンデからすれば決して誰にも退けは取っていないと確信をしています。そのやる気も束の間とは言えないにしてもやがて挫折感におち入り、こんな所はもう嫌だと思った時も正直言ってありました。そんな私の気持を抑え切れずある日、校長先生に私は一通り果樹園芸を学んだら次は果物加工（主にジュース）を勉強したいのですがと意向を述べたところ、それならば知人の農家でみかんのジュースの製造をしている人がいるので当分行ってみるかといわれ、高知県は南国市の岡家に住み込み、約4ヶ月間の農家実地研修を行なうこととなった。この岡さんは、この地方では知らない人はいない程、有名で人望も豊かで、しかも経営の面においては極めてすぐれており、こんな農家で研修、出来たことはただ恵まれていたとしか言えません。この方の家庭はすごく明るく、親切で家族同様、可愛がって頂きました。ここでは主に温州みかんとその加工そして養鶏を営んでいて、一般のサラリーマンでは考えられない程の収入を得ています。岡さんは私に言い聞かせるようにしきりにこう言った。“今後の百姓はただあくせく働くだけではいけない、利益が伴わなければやる気も起こらないし、また無意味である”と。確かにその通りと思う、世の中総てお金だとは言いたくないが、やはり最低限の所得は必要だし、誰も求めたいし、またそうでありたい。これからの農業はただ働くだけではいけない。頭を使い、そして実行あるのみなのです。

この岡家ではみかんの収穫、貯蔵法等を手つだいながら学び、そのかわり養鶏を手つだったり、かと思えば道路補修や土方みたいな仕事もやったり、その間にみかんの果汁入りジュースの製造法をしっかりと習い、身につけることが出来ました。

岡さん一家には気に入られてもうずっと残れ、と言われたけれどそれも成らず、今年の4月には再び農大に戻って2学年としての学生生活が始まる。虫の良い話である。4ヶ月も校外に出て戻ったら今度は2学年に進級していたとは……。更に、幸せなことには9月17日に全校を上げての修了式を挙行して下さったではありませんか。しかも私と有田君のたった2名だけの為に。有田君の方は初めから最後まで農大で頑張ってきたのだから当然かも知れないけれども、私の場合、2学年になってからも依然、学校の教課に飽足らず今度は果樹試験場に行かせて下さいと頼み、7月から農大を出ていますので、実質的に農大で研修したのは一年にも満たない。にもかかわらず修了証書や記念品まで頂き、本当に感激でいっぱいです。特に全校生徒がお金を出し合って高級腕時計を贈呈

して下さったのには胸がいっぱいになりました。

この一年半の間私は友達に恵まれていたというべきか、農大以外にも各方面に知り合い、友人が出来、その友人の友達とも知り合い、まるでネズミ算式に増加し、現在では数え切れない友達が出来た。特に親しい人も中にはいて、ある人はサンゴのタイピンを、ある人はシャツを、と数々のプレゼントを頂いたりもし、また試験場も含めて友人達のグループがそれぞれ送別会を計画してくれてもいるようである。話を元に戻そう。いや、とにかく私はあらゆる方面に知り合いを作り、男女を問わず付き合ってきたけれどもその結果、得た事は人づき合いがいかに大切かという事とまたそれがいかに、難しいかという事でした。

さて、今度の研修の成果は果してあったのかについてですが、自分としては、充分の成果を得たと思っている。と言いますのは、以前の自分と比較した場合多少ならずとも知識においては以前とは比べられない程、向上している、と自信をもって言えることです。しかし、かと言ってこれで満足した訳ではありません。まだまだ物足りない気持ちでいっぱいです。むしろ、仕方のないことではあり、また果樹および農業を一年やそこらで総てを学ぶと言うことはどだい無理な話なのです。しいて言えばカジュの“力”の字がやっと理解出来たと言うのが本当のところかもしれません。なかでも果樹試験場では果樹栽培において最も欠かす事の出来ない接木、みかんの摘果は人にも教えられる位になりました。それと、柑橘のウイルス病についてはかなり専門的に研究に取り組み、ついには論文を作成するに至りました。これもひとえにすぐれた研究員の真鍋先生について実習出来たからであると確信しています。さて、この期間中に日本の社会の実情がおおむね解ったように思いますが、なる程日本は素晴らしい国であります。しかし反面日本の社会には矛盾があり過ぎるように見受けられました。最後に帰国後の抱負を2~3述べたいと思います。先ずやるべき事は現在栽培している大豆、小麦の品質、収穫の向上に全力を尽くし、しかる後に新しく土地を購入し、柑橘類および、ナツ、カキ、ブドウといった果樹を少しずつわが家の経営に導入したいと考えています。更に、果樹栽培の技術を地域の青年達に指導もしたいと思っています。しかし、何せまだ未熟ゆえ帰国後もこれ迄より、以上に勉強する必要があるし、またせまられるでしょう。少しでも地域の為になればそれだけでも研修の成果が生かされると思いますし、是非、そうしたいと考えています。

研修報告を終るにあたり長い間、私のような者のめんどうを見て下さった農業大学校、立田校長先生、岡浩之様、果樹試験場、小松場長、その他県下の皆様、本当に世話になりました。

また、こんな素晴らしい研修をさせて下さった事業団の皆様には心から感謝いたします。

1982年9月吉日

1. 研修機関 (1) 前期 群馬県勢多郡富士見村大字小暮2425番地 群馬県畜産試験場  
(2) 後期 群馬県前橋市総社町総社2788 (株)都丸孵化場
2. 研修期間 1981年4月～1982年9月
3. 研修職種 飼養技術管理, 孵卵, 初生雛雌 鑑別
4. 当初の研修計画

“ 私しの学びたいもの ”

数年間、雑作が異状気象により、不作、安価がつづき養鶏も管理飼料、病気で農家は苦しめられてきました。飼料につきましては、中心地にサイロが建設され、大豆、トウモロコシ、小麦、他の貯蔵ができるようになり、飼料としては明るい見通しがつきましたが飼養技術管理の中でも衛生、予防の技術なく不安な経営を送っています。日本で飼養技術管理を取得し、少しでも移住地のために生かし役に立てたいと思います。

#### 5. 研修概要(具体的研修内容及び成果)

前期は畜産試験場で基本的な事を学び(育雛, 育成, 成鶏)管理, 予防接種など養鶏全体にわたり講義と実習を受けました。雛の餌付けも温・湿度をよく見て回り, 雛の状態を観察する事が重要です。育成, 成鶏期間の体重測定, 制限給餌, 卵重測定し記録します。中でも一番感心もったのはコマーシャル鶏, 12群で経済能力検定し産卵調査, 生存率, 摂取量を調べ記入し, 比較をしながら他鶏種の選択に役立ってます。

講義も飼料計算, 衛生と受け, 病気は伝染性のため鶏病を解体し病気を理解する事は出来ませんが, ワクチネーションプログラムに従い定期的に接種すれば防ぐ事もできます。鶏舎の観察, 早期発見も重要です。その他, 病状, 病名も勉強しました。

後期は都丸孵化場に入り, 孵卵, 初生雛雌雄鑑別の研修をしました。孵化場では発生日は週3回, 月木金で月曜がもっとも多く雛にして10万羽以上は出ます, 入卵の準備は種卵の中からきず卵, 奇型卵を取り出し, 1セット13,000卵入れ, ホルマリンくん蒸を行い室内で少し温度を与えます。機内の温湿度とあまり差がないようにし, 卵に急に湿度の変化を与えてもいけません。セツタの中では19日間すごし, ハツチャーに移卵されます。移卵も中止卵, 無精卵を取り出し発生をまち, まず発生雛は良い雛だけを箱に取り出し, ロット別に番号を書き鑑別されます。最初に抜雄を用いて練習しますが, 雛の足が邪魔であったり, 思うように手に握る事ができませんでした。

鑑別の準々を書きますと, 雛を右手で取り左手に移し右手で又持ち, 胎便, 人差指かろく肛間にあて, 親指の爪で肛門の部分を押し, 突起を出します。突起を見るだけでは, まちがいも多くなり八字状まで見て雌雄に分けます。中には雄, 雌が見分りのつかない雛が中にはいますので解体し生殖線を観察して精巣であるか卵巣であるか良く確め参考にします。

注意する事は鑑別操作において雌の一生に傷害を与えず迅速に処理することです。

最近は無鑑別を200羽ほど雄雌に分け、鑑別師に見なおして貰いますがまちがいの少なくなりました。鑑別師の熱心な指導もありまして、雄、雌がなんとか分けられるようになりました。私は今、鑑別師資格の試験を受験するため訓練を夜遅くまで続けていますが、これ迄ご指導下さった先生方には心から感謝しています。



## 6. 当初の研修計画と実際の研修内容とを比較して

始めの希望は飼養技術管理で鶏の事は然々わからなく、日本に来日してはじめて養鶏の事がわかるようになりました。研修期間中学んだ事は衛生、予防接種、孵卵、牛課程の人工授精、初生雛、雌、雄鑑別と数多くデリケートで複雑な技術でした。実習は体で体験し、講義を受けても、専門書の大事なところはコピーして貰うことができ、養鶏に関する資料を集めることができました。

又、試験場での生活実習していたおかげで牛課程の人工授精の講義、実習、試験を受けられる事ができました。始めは漢字を一つでも多く覚える予定でしたが、テキストを開くと専門用語が多く辞典を使用する回数が多くなり勉強になりました。冬でからっ風が吹き寒く、眠い毎日がつづきましたが、どうにか合格証明書を手にする事ができました。一生に一度という機会にこの様な技術が取得できたことは幸運だったと思います。

## 7. 合同研修会について

私達11期生は日本での研修期間中最後と言われる研修会が8月17～21日まで京都と北陸で行なわれる事になりました。

予定日より早く出て伊勢神宮、奈良を見学し、京都に着くと雨が降っていました。集合時刻を1時間と少しすぎ旅館に着きその日は食事をすませて、夜遅くまで友達と語り合いましたが、帰国延期の日なりさびしく不安な気持ちになりました。

つぎの日は京都定期観光バスに乗り、比叡山、根本中堂、横川中堂に行く途中から、立ち並ぶ京の街なみ、どこまでもつづくびわ湖の景観、茂る杉並木が素晴らしく胸がうたれます。その後びわ湖大橋、びわ湖観船で回りました。

19日は研修報告、帰国予定日を責任者と話し、昼からは自由行動になり少しでも京都を知りたいと友達と一緒に観光バスに乗り、三十三間堂、金閣寺、清水寺、平安神宮、数々の歴史をたずね、古代のお寺、神社の建築や仏像はすばらしく、美しい庭園は心を打たれるものがあり感激しました。雨の中マイクロバスで北陸自動車道を通り、永平寺に着きました。永平寺は杉並木の中に壮大な大



寺院曹洞宗の大本永平寺があり、ここでは全国から集まった修業僧が朝早くから修業に励んでいます。永平寺を後にして、日本海に面している東尋坊に行き、巨大な岩が立ち並び、深く青い海が印象的です。合同研修会も加賀温泉で最後となり5日間雨降りや曇り雨といたい雨が雨のお陰でひとつの思い出もでき、無事に研修先に戻れた事を心から感謝しています。

#### 8. 本邦での生活状況

桜の花が咲き始めた頃、日本を訪れ1年半が過ぎ生活を振り返って見ると、1年間は県内の研究生8名と同じ釜の飯を食べ、風呂、洗濯も一語の寮生活でした。年齢の差もあった事と思いますがコミュニケーションが難しく、生活様式、育った環境、習慣等が異なり、始めの内は当惑しました。外周から来た事と語学の心配がないと思われ月日が立つにつれて仲良くなれ、時間を過ぎるのをわすれ、夜遅くテレビを見ながら話しをしたり、時には励まし合いました。時間を見ては県内、県外と案内してもらいました。中でも日光まで案内してもらったり、冬には仕事が終わってから出て19時にスキー場に着き、夜遅くまですべる事も出しました。道具を付けるトリフトに乗せられ上まで行き、始めての事で練習もしてなく、不安があり、少しすべるたびにこぼり、下に着くとポットしました。フワフワと降ってくる雪も顔にあたれば冷くこの様に数々の思い出があります。

半年間は会社が経営するアパートで一人りの生活に入ります。会社まで歩いて行きます。途中には田畑があり、火、土曜日は前の日に出来たものをこして置き、朝5時30分に起床し行きますが、数人もう仕事をしています。日本人の勤勉、努力が心に打たれ、眠い気持も忘れ、朝食までの時間で練習します。研修期間中は食事の心配はなく、長宅で家族と一語に出き、お陰様で研修にうちこめる事ができました。

様々な人との出合、意見をきき自分の知識が広がった事は大きな収穫だった事と思います。

#### 9. 今後の子弟研修制度に対する提言及び要望事項

特にありません。

#### 10. 所感(帰国後の抱負を含め)

私の研修は養鶏の飼育管理技術、孵卵、初生雛、雌雄鑑別を1年半で学んできました。

試験場では講義、実習を受け、場外研修にも連れていってもらったり、1カ月間農家実習もスケジュールの中に組んでもらい、農家の経営状態、鶏舎の配置、構造も高床、開放式、ウインドレス鶏舎がわかり参考にさせていただきました。

大型農家は何万羽と飼い、給餌、給水、集卵を全自動にしコンピュータを導入し衛生、育成、産卵、生存率、1羽当りの摂取量調べ、高い収益を上げようと努力しています。この様な技術を見ても先進国はうらやましく思います。その点バグアイの畜産農家の問題は大部分の飼料が輸入で、他国の豊作、不作で大きく経営に響き、生産調整、公害問題があげられます。

その反面、農業国、内陸地のバグアイ、養鶏も問題が多く、鶏種の選択、衛生、鶏舎の構造配合飼料の成分、資金の問題がでてきます。

ブロイラー採卵鶏を飼育していくにしても、孵化が重要なポイントをにぎり、教った話によれば、よい雛、よい飼料、良い管理が必要で、雛が良ければ育成率、成鶏期になっても産卵率がよくなってきます。

今まで多くの人達に迷惑、心配をかけてきましたが、私は私なりに帰国後の事を思い責任の重さを感じ、今日まで一生懸命頑張って来ました。

最後となりましたが、この様な機会を与えて下さいました国際協力事業団の皆様を初め群馬県畜産試験場の方々、そして都丸孵化場、鑑別師の皆様方に心から感謝し、皆様のご健勝を祈り致します。

山内京美

1. 研修機関 (1) 前期 大浜第一病院, 沖縄県立浦添看護学校  
(2) 後期 大浜第一病院, 沖縄県立浦添看護学校, 沖縄県医師会産科看護学院。
2. 研修期間 昭和56年4月～57年9月
3. 研修職種 看護婦
4. 当初の研修計画

当初の研修計画としまして、1年半大浜第一病院を研修実施の場としまして産科看護を中心に、外科看護、内科看護のあり方を学ぶ為、各病棟、外来をローテーションし産科では、妊産婦の健康管理、分娩介助、新生児の看護及び保健指導、外科的看護は、術前、術後の看護及び外傷、骨折患者の取り扱い、内科看護におきましては、慢性疾患の看護及び保健指導のあり方を実習しました。午後は浦添看護学校へ通学し、理論的知識を得たいと思いました。

#### 5. 研修概要(具体的研修内容及び成果)

大浜第一病院内の産婦人科病棟で処置を中心に分娩の介助、新生児の取り扱い、ベットメイキング環境整備、回診時の介助の際には、治療方針、患者の訴え、疾病による症状個々患者のもつ問題などを観察し、行なわれている看護を把握し、11ヶ月間婦人科外来において外来診察の介助、臨床検査の介助、妊産婦定期検診、母親学級、保健指導、産後1ヶ月検診、婦人検診の介助を行い、産婦人科疾病や治療の知識・技術を得、特別実習におきましては、基礎及び各論実習は患者を受持ちニード把握・看護計画・具体的看護・看護記録を指導者のもとで習得しました。

精神科においては、患者とコミュニケーションやリクリエーションを共にし、又、ドクターや看護者のチームカンファレンスを通して見学実習ではありましたが、精神科看護について認識することができた。老人ホームにおいては、食事介助、身体の清潔介助やコミュニケーションを通じ老人についての理解を深め寮母さんをはじめ各専門の方々の役割りや老人ホームの成りたちについての説

明をうけ短い期間ではあったが、老人ホームとは老後の生活を有意義に過ごす為の場であることが理解できました。その他に第18回沖縄県看護研究学会、第1回九州地区看護研究学会への参加、および日本看護婦協会会長石本しげる先生・沖縄県立中部病院小児科医長安次嶺先生や多くの先生方の特別講演も聞かせて頂きました。更に新生児期、小児期、成人期、老人期とそれぞれの特徴を踏えた看護のあり方をあらゆる方面から体験することができました。



#### 6. 当初の研修計画と実際の研修内容とを比較して

当初の研修計画は、実習の場は大浜第一病院で特別に指導者はなく自分なりに研修し、理論的知識は浦添看護学校内で得ることでしたが、多くの施設において、指導者のもとで実際に体験し、多くのことを学ぶことができ、又、日本の看護の実態を体験し得ることができました。

#### 7. 合同研修会について

遠い南米から技術を習得する為、家族や友人達から離れてここ日本に来た私達にとって、同期子弟研修生が兄弟のようであります。

合同研修会により17名あるいは、先輩や後輩達と会い、いろいろと語りあったり、意見交換などをし、又、春・夏期のすばらしい研修旅行により、日本の文化や歴史に触れることで、社会的知識を得ることができたと思います。

#### 8. 本邦での生活状況

マンション内の大浜病院看護婦寮での1年半の生活を振り返ってみますと、毎日バスの通学・通勤は楽しく、又、院内食事、外食・週3-4回の自然で食べることをはじめ、人間関係は恵まれ、よき指導者の方々に囲まれて、よい研修生活を送ることができました。

#### 9. 今後の子弟研修制度に対する提言及び要望事項

要望事項としまして、先輩の方々からも意見がありましたが、できましたならば、研修期間を2年制度にして頂きますと私達研修生側としましては、もっと充実した研修の成果を得ることができると思います。

## 10. 所感（帰国後の抱負を含め）

沖縄で生まれ1才の時にポリビア国へ移住し、1981年4月移住者子弟技術研修生として看護の技術、知識を得る為帰国した。1年半の研修を振り返ってみますと、日本語が不十分で特に専門語になりますと、難かしく理解するのに困難なことが多く教科書は読めず実習講義をうけても溜息をつくばかりの生活を約半年間送ってきました。

月日がたつにつれて病院にも慣れて教科書・講義もある程度理解できるようになり、限られた研修期間内でどこまで看護婦としての知識を得ることができるか、又どのようにすればよき研修成果が得ることがと悩みましたが、私達のことを良く理解して下さっている教務の先生方の指導があり、また、多くの施設で実習させてもらい、実際に体験し学ぶことにより、今まで看護者として不満におもっていたことの解決法や看護の難かしさ、知識不足を新たに認識すると同時に反省することが多くありました。

そして看護者である私達に学ぶことに対して終りはなくこの道を歩いていく限り、研究しつづけねばならないということも知り、研修を終えてポリビア国へ帰りましてもここで学んだことを土台にし、これからも更に勉強を続け看護に役立て移住者及び地域の人々の健康管理者として、頑張っていきたいと思います。

井上悦子

1. 研修機関 (1) 前期 宜野湾胃腸科医院、浦添看護学校  
(2) 後期 宜野湾胃腸科医院、浦添看護学校、今年9月から産婦人科（新里病院）
2. 研修期間 昭和56年4月～57年9月
3. 研修職種 看護婦
4. 当初の研修計画

当初の計画としては、おもに産婦人科を学びたいと思っておりました。宜野湾胃腸科医院では外科、内科しかなく、残念だと思っていた所、院長先生のおはからいで後半に産婦人科の病院を紹介されることになりました。午前中は宜野湾胃腸科医院で実地の研修としておもに手術前後の看護、外科、内科の特徴を踏え、午後からの浦添看護、看護に通学において、看護の理論的な裏付を得るという方法で研修を行いました。

## 5. 研修概要（具体的研修内容及び成果）

この一年半宜野湾胃腸科医院で午前中病棟、外来の実地研修をさせていただきました。病棟ではおもに内科疾患が多く、内科的の急変の特徴を修得したように思います。外科では月に4-5日ぐらいの手術が行われ、手術の種類としてはヘルニア、虫垂炎、胆石、胃マーゲン等につき研修すること

とが出来ました。又、外来では胃レントゲン、胃カメラ、病名診断など、その他に学校の先生方の御協力により、保育所実習、琉球大学付属病院では内科、外科実習、那覇市立病院では産婦人科実習、ありあけの里では老人看護の実習、精和病院では精神看護の実習を行ない、それぞれ科の違い、特徴を理解したように思います。

#### 6. 当初の研修計画と実際の研修内容とを比較して

当初の予想以上の研修が出来たと思います。

#### 7. 合同研修会について

同じ南米の研修生があつまり、兄弟のように思われ、みんなと顔合せるのが楽しみでした。またみんなと一緒に日本の文化、自然にふれ良い社会勉強になりました。

#### 8. 本邦での生活状況

病院内での寮生活で、午前中病院で実習、午後から浦添看護に通学し、生活面での不自由はなく、又、人間関係、食事、交通の便、日常生活の言葉の点でも不自由なくこの一年半の研修を終えることが出来ました。休みの時は職場でのボーリング大会、食事会、月見会、夏になるとビーチパーティーなどに参加し、私にとってこの研修期間のすべての出来事が良き思い出として一生残るものとなりました。

#### 9. 今後の子弟研修制度に対する提言及び要望事項

特にありません。

#### 10. 所感(帰国後の抱負を含め)

夢と希望に燃えて両親の祖国で技術研修を始めてから早くも一年半の歳月が過ぎさろうとしています。去年の4月に家族や友達に見送られ日本へと旅立ち、日本に着いた時には桜の花で迎えられ、あの時、本当に自分が日本に来たと言う実感がわき、このことはいつまでも忘れられない日本の印象として残ることでしょう。

海外移住センターでの最初のオリエンテーションを終え、研修先の沖縄に向い、那覇空港に着いた時には、親戚の方が迎えに来てくれました。生れて初めて合ったおじさん、おばさんの顔を見て自分の夢がかなえられたように思い、あの感激は言葉ではいい表わせないくらいでした。あれから春、夏、秋、冬そして、二度目の秋を迎えながら一年半の歳月が過ぎさろうとしています。

当初、午前中は直野湾胃腸科医院で実習し、午後から浦添看護学校に通学、ボリビアでは、看護学校への通学の機会もなく看護の経験も少ないまま日本の看護学校に入学して自分でも思ってもいなかったより良い看護学を学ぶことが出来たと思います。

① 看護は、人間を扱う技術であり一番大切なのはコミュニケーションである。

② 健康とは身体的、精神的、社会的、完全な安定を保っている状態であるなどその他多くの基礎的学課。

又、保健指導、社会復帰への援助を学びました。又多くの施設での実習も得る事が出来、日本で得